

土

淨

號 月 一 十

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十六年十月廿日印刷納本 昭和十六年十一月一日發行

第七卷（第十二號）



陸海軍 病院

慰問浄土

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に三ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に七千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十二萬餘冊の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願い致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◆全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◆一口一圓二十錢の浄財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◆毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◆個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◆御送金は浄土宗務所事變部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

告豫刊近

中
村
辨
康
著

日常勤行式講讃

「日常のおつとめ」と經文の解説とを兼ねた便利な修養書！
座右に備へて正しい信仰に精進せられよ！

淨土宗で必要な經文を全部納めて誰にでも解るやうに一々懇切な解説がついてゐます。即ち一々のお經文について和譯と意譯とをあげ、それに中村師獨特の麗筆を以て懇切な解説をほどこし、更に字解までつけて一讀よくその深底を味ひ得るもの。會員各位の佛壇に供へて修養に最適です。僧侶各位の書架に一書を加へて手近かな修養の參考資料となり、説教その他の教材に最も便利です。

B 6 型 クロース 装

發行所 法然上人鑽仰會

價一圓五十錢

十一月下旬發賣豫定

東京市芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

淨土十一月號 目次

表紙・扉・目次カツト……………河村 良 孝

隨筆 木魚の音……………吉田絃二郎(六)

先師を語る 渡邊海旭先生……………増田文雄(二)

法然上人和歌註解……………安西覺承(六)

白道に精進せよ……………佐山學順(六)

信仰相談……………擔當中村辨康(五)

傷痍軍人療養所物語……………鈴木良和(六)

信仰感話 清めの朝……………金田明進(三)

會員通信……………(五)

戰線だより 墓標……………東 滋 刀(三)



信仰のため
の闘争記録

或る病兵の手紙

編輯部 (一)

童話 勇敢なビボー……………小林 一 (四)

實話 楽しい満員列車……………木村庄 八 (六)



小庵にて……………子母澤 寛 (六)

まんが 寄席中繼……………漫畫協團同人 (四)

歌壇……………與謝野 晶子選 (五)

俳壇……………太田 耳動子選 (五)

柳壇……………西島 ○ 丸選 (三)

法語
解説

求道への發足……………中村辨康 (五)

吉水會尼僧の赤誠……………(英) 編輯部だより……………(毛)

開眼せよ……………(九)

心臓病を自宅で出来る

初めてのお方に限り試薬七日分進呈

漢方療法の紹介

十一月號(16)淨土愛讀章

昔より數限りなく色々の心臓薬があります
が、茲に御紹介致します心臓病の家庭治療薬
は、他に比類ない良薬であります。

此の良薬で、速快せられた小川家をお訪ねし
て左のお話をお伺ひしました。

過ぐる昔の年の末小川氏の家族の者が長年
の心臓病で難儀してゐたのが危険状態に陥り
ました。親族なる醫師二人の御診斷は一つで
唯だ死の宣告! と同様に信じた時でした。

お正月を目前に控へて命旦夕に迫り、遠方の
親類縁者へ急を報じて萬一に備へてゐたので
す。

恰度其の時でした。取引先から商賣上の關
係で集金に來られた知己が家内の取込んでゐ
る事情をお聞きになり強く御同情になりました
て「兎も角効くかきかぬは第二として、國元
に斯様なお薬があるからお取寄せ致して進ぜ
る」として早速電報を以てお取寄せ下さつたの

が此の心臓病の良薬で御座いました。

當時病人は、前述の如く既に危篤にして、
醫師も匙を投げ、食事も、只僅かに鶏卵
の黄味一二箇にて、其の日の露命を繋いでゐ
る有様! 衰弱は刻々迫り、枕頭に見る目も
痛ましく、憐れた状態でした。

而も母親の幼兒を憶ふ情は切なるものでし
た死期に瀕して猶ほ幼兒の事共囁言するの
でした。今は唯一縷の望みとしてゐるのは取引
先の知己が話されたお薬があるばかりでした
お薬が着きましたので、取る手も遅しと服用
させました。洵に之れ奇蹟と申しませうか。
天命未だつきなかつたのでせうか、斯程重態
の病人が不思議にも命を拾ひまして、服用後
數日ならずして血色順に加はり、うるほひを
帯び気分もすぐれ食慾さへ増へるのでした。
暗雲にとざされてゐた一家は、この時漸く愁
眉をひらきました。

然し乍ら、今が一番大事な秋、萬一にも失
策つては取返しがつかぬからと、慎重に看病
に全力を盡しました。其の效あつて旬日を出
でずして二階で臥せつてゐた病人が便所へ獨
りで行きました。實によくきくのに驚かされ
ました。

心臓病でお困りの方は服用すれば必ず效驗
を認め得るだけの試薬と「心臓病の心得」と
云ふ小冊子を添へたものを初めてのお方に限
り無代で淨土愛讀者に限りお頒ち下さる様特
に交渉致して置きましたから心臓病で悩んで
居られる方々は發病以來の容體と年齢、職
業、男女の性別を、精々能く書き愛讀者
の印として本誌愛讀者の章を切抜き送料とし
て三錢切手二枚同封し、大阪市西區ウツボ下
通一丁目八番地南子直輪出商小川周三様宛に
御申込み下さい。御申込の節、右の規定に反
したる、御申込に對しては、御返事を致しま
せぬ故、特に御注意下さい。右の事實をうた
がふ人は此の病氣から救はれないお方だと信
じます。

尙此の條「心臓薬」は心臓かつけ、しびれかつけ、は
れかつけ、前節後血がつけ、子宮血の遺病、慢性胃腸
病、神經衰弱、貧血せんそく、十二指腸、黃疸等に特別
に良く効きます。亦何病に限らず大患後の回復期に服用
なされると、非常に早く回復しますから、心臓病同様御困
りの方は御服薬をお薦め致します。

淨土

十一月號

かくのごとくして

又^{また}昨日もいたづらにくれぬ、今日も
又^{また}むなしくあけぬ。今^{いま}いくたびか
くらし、しまいくたびかあかさん
とする。

(御法語)





筆 隨

木

魚

の

音

吉 田 絃 二 郎

鹿ヶ谷法然院に詣でた日、二十五菩薩に供へられた二十五の椿の群花の前に、亡くなられた萬里小路師に案内せられた春雨の日を時々思ひ出す。拭き込まれて眞つ黒に光つてゐる板の間に大輪の赤い椿の花が三輪づゝ一とかたまりにして、二十五群だけ、きはめて均齊の取れた列べ方で供へられてあつた。幾百年の静寂と幽香をこめた御堂の空氣のたゞなかに朝毎に手折つてさゝげられた花の色はたとへやうもなく尊いものであつた。

その後わたくしは武蔵野の家の庭に花の咲くごとに法然院の供花を思ひ出すのであつた。

今年の秋は信濃の旅からかへつて來た庭には毎朝

幾十輪の芙蓉が露を帯びて咲いてゐた。わたくしは法然院の花を思ひ出しては毎朝一輪づつ芙蓉の花を手折つて佛に供へることにしてゐたが、數日前から芙蓉の花もわづか二三輪づつ咲く程度であつたが、今朝はすでに一輪も咲かなくなつた。庭に下りて行つて花なき芙蓉の前に立つた時悵然として深まりゆく秋を今さらのごとく感ずるのみであつた。庭には年中何かの花は咲いてゐる。しかし毎朝手折るには忍びないものもある。芙蓉は朝咲いて、眞晝ころはしぼんでしまふので、花だけ供へるのも氣易い心とする。

十日ばかり前から山茶花や茶の花が咲きはじめ



た。佛間にちかく、軒に迫つて咲く花はそのまゝ佛に供へたつもりである。

佛間の濡れ縁の下のは、露の花もみつひきの花も咲いた。鶏頭も眞つ紅なとさかをひろげてゐる。蟲も鳴き、小鳥も啼いてゐる。

「愚案するに冥土もかくや秋の暮」
縁に端坐して芭蕉の句を想ふこともある。

生きることもありがたい。死して秋のやうな冥土に入ることもありがたい。

尙う一秋生きてゐたい。尙一秋生きてゐたいと思つてゐる間に一年一年と老いてゆく。

×

このころしみじみと來年の秋を待つころをうとましく思ふ。來年の秋はおるか明日の命、一呼吸後の命もわからないのが人間の運命である。

今朝も庭の木を眺めてゐると、見てゐる面前で、秋風につれて後から後からと梢の葉が散つてゆく。

人間の命も、宿命も同じことであらう。

それを思ふと一日一刻の生活の尊さが身に沁みて来る。人を訪ふにしても今日かぎりの命と思へばあ

だやおろそかにはされぬ。一碗の茶も一顆の菓子もおろそかにはいたゞかれぬ。さりげなく語る言葉もあだにはならぬ。一本の消息もなげやりの氣持では認められぬ。

知らぬ人と知らぬ人とが偶然の機縁に結ばれて十年の知己となり、終生の友となる。一利那の裡に永遠の芽が内包されてゐる。尊いかな一利那の生存である。人とたゞ一度邂逅ふ機縁も亦尊い哉である。

たゞしかしその尊い機縁を恵まれても、その尊さを尊さとして受け容れるためには、心を澄まして機縁を待つ心がなければならない。苦行であり、忍苦である。山の尊さを感じるためには歩一歩嶮峻を攀ち登らなければならない。

幾日幾夜の辛勞の後人は嶺の上に達して眞に山といふものの尊さを身に沁みて感ずる。人はわづかに利那的な山上の靈感に觸れんがために數晝夜の苦行を忍ばなければならない。

人は臨終利那の一念のために五十年或ひは八十年の人生を苦行するといふこともできよう。わたくしたちはよく死ななうがためによく生きんことを念ず



る。

釋尊の尊い涅槃は幾千年の間、人間の生死について正しい嚴かな考へ方を示めてゐる。涅槃は釋尊の生活と教への最高峰である。絶對示唆である。

どんなに卑しい人の死であらうと、どんなに無智な人の死であらうと、死ほど嚴かなものはない。

死ほど尊いものはない。

どんなに無智の人の死であらうと、もしそれが靜かな、忍從的な、歡喜的な死である時、それは尊い涅槃の示唆を持ち、尊さを持つ。

わたくしたちがよき死を死ぬといふことは、隣人への最後のそして最も尊い贈り物をさぐるといふことになる。

わたくしたちは生きてゐる人間として最も深く思ひ、人間として最も深く徹するところの生活を祈念する。一人の人間が深く生きることがやがて周囲の人々を深く生かすこととなる。そしてわたくしたちは死ぬる時最も靜かに歡喜の一念に瞑默せんことを冀ふ。靜かな一人の大往生は多くの周囲の人々の往生觀を正しく導くであらう。

X

京都に旅すること、わたくしは朝早く駄屋町の宿を出て、三條の大橋を渡つてやがて知恩院の山門の前に立つのを例とした。これは三十年來の旅の習慣になつてしまつた。たとへば本堂まで石燈を登らぬにしても、京都に行つたをりは必ず一度は朝早く妻と二人であの山門の前に立つたものである。それはたゞ本堂の方から洩れて來る朝の勤行の木魚の音を聽かんがためであつた。靜かに露に夜明けたばかりの草の中に佇んでかすかに響いて來る木魚の音を聽くといふことは胸とゞろかすほどのありがたい法悦であつた。そこには何の理論もなく、教理もなかつた。しかもそれは説教以上のものを持ち、本質的なものを持つてゐた。

恐らく朝ごとに佛前に木魚を叩く人々は、山門外に木魚を聽く人の心がいかに淨められつゝあるかを想像したこともないであらう。

靜かな木魚の音だから、人の心に迫るものを持つてゐるのであらう。それは巷の人間に聞かすべき聲でなく、佛さまに聞かせるためのものだから、人の



心に迫るのだ。佛さまとわれとたゞ二人のものだから人の心に迫るのであらう。

×

「友よ！」とわたくしは友の言葉を遮つた。

「窓の外のを聴け！」

夜は更けてゐた。故郷の城下町には夜々菱の實を賣る女たちが、觸れ聲を夜の暗に溶かしつゝ、小路から小路を歩いてゐた。

今夜も美しい菱賣りの聲が窓にかく響いて來た。

秋の夜の深さと寂びをこめた聲であつた。

友とわたくしは默然として菱賣り女の聲を聴いた。

空には星がまたゝいてゐた。

四十年後の今日、わたくしはなほ秋の夜の菱賣る女たちの天心に澄むがごとき聲を想ふては心を淨くせらるゝ。

無心にしてうたはれたる聲は尊く、人間の心にひびく。

わたくしは庭を歩いてゐて、不圖地に落ちた白い花片を踏まうとした。しかし咄嗟に、わたくしは足

をとめた。

それは白い山茶花の花片であつた。

白い山茶花は落ちるがまゝに落ちて黒い土の上に

眠つてゐた。

何といふ静かな眠りであらう。

何といふ尊い死であらう。

わたくしは何としても白い花の一片を踏むに忍び

なかつた。

わたくしは白い花片を覺まさないやうに道をかへて歩いた。

心眼を開け

佛教には開眼供養といふのがある。木像なり畫像なりが出來上るとこれに靈を入れる式である。

當今の學校教育は、能く知識を啓き議論を教へるが、出來上つた學問に開眼式を行はない。即ち靈を吹き込むことを閑却してゐる。爲めに毫も心眼が開けない。物を見透す力がない。

畫龍點睛はついにそれ宗教的信仰の修養か。

(道重信教上人)

先 師 を 語 る…7…

渡邊海旭先生

増 谷 文 雄

行誠上人について、わたくしは、渡邊先生のことを、少々お話ししてみたいと思ひます。それも、わたくしが全く自恣的にさう思ふのではなくていろいろと理由もあり、因縁もあつて、かうした順序で書いてみたいと思ふのです。

おふた方の因縁といへば、先づ思ひ出されることは、このおふた方とも、江戸の生れであつたことでせう。

前にも記したやうに、行誠上人の生れは、武蔵國豊島在でありますから、嚴密にいへば、江戸内ではなかつたのでありますが、いまではそこも立派な東京市内になつてをり、それに何よりも、行誠上

人その方の人となり、僧としては珍らしいほどに、江戸ッ子氣質を藏されてをられました。

渡邊先生の生れは、淺草の田原町の町家であつたさうで、田原町といへば、淺草六區の入口にあたり、東京市内でもつとも繁華なところの一つでありますから、先生はまさに生粹の江戸ッ子であつたと申すことが出来ませう。

而して、行誠上人が、江戸ッ子であられたことが、その風格の大きな要素をなしてあたとおなじやうに、渡邊先生の風格をつくつた大きな要素の一つは、先生が江戸ッ子であられたことを否定できないと思ふのです。





勿論、そんな關係から許りではありませんが、行誼上人と渡邊先生との間には、どことなく人物において、風格において、相通するものが感ぜられるのみならず、明らかに渡邊先生は、行誼上人をもつて、その師表と仰いでおられたことを知るのであります。

そのことは、先生の言葉の中にも、しばしば窺はれたことでもあり、また先生の書かれたものに就ても知られることであり、殊に先生の若いころに書かれた「豊澄和上と行誼上人」なる一篇などには、明らかに且つ感銘ふかく述べられてをるのであります。わた

くしはいま、

先生の晩年の逸事について、その間の消息を記してみたいと思ふのであります。

渡邊先生

は、亡くなる一年前に還暦

を迎へられました。その還暦を盛大にお祝ひしたいといふのが、門下生たちの切なる願ひでありました。その前後には、教界や學界の長老の還暦の祝ひが、二三盛大に催されたことでしたが、それよりも、つと盛大に先生の還暦をお祝ひしたいと、門下生たちは非常に張りきり方でありました。

だが、渡邊先生は、その切なる願ひをも却けて、どうしても許されなかつたそれは僧たるものに還暦の祝ひはあるべきでないとの固い信念によるものであります。その時、門下生の代表に送られた書簡には、次のやうに記されてあります。

何卒、拙生の平素の信念主張を御酌取の上、拙生に關する祝賀の儀は、一切御取止の程、偏に懇願仕置候。

大體、僧門には賀壽の法無之、明末清初、法運の澆漓に乗じて、謔談好事の倣俗行事、多少は名山大刹にも行はれ來り、先哲の苦言も有之候事と覺え居り候。

拙生平素の師と仰ぐ慈雲、普寂、貞極は勿論、近世の行誼和上にも、あの御高齡にして、嘗て賀壽の儀無之、比等諸大德とは同架は出来候はねども、拙親教師、西光寺第十五世海定も、同寺としは功績多く、檀徒の歸仰も特に重く、拙生の今日あるは全く海定の遺徳に候も、是又賀壽の儀無之候。

拙生、此等精神上及事實上の指導を模範として進む已上、假令、破戒汚行言ふに足らざるも、尚且僧門たるの眞骨頂丈は、たゞく

でも保持致し度候。

折角御厚志に行はるべき賀壽の儀も、右様の次第にて、寶蓮臺上諸大徳の彈詞の恐あるのみならず、現時にても、一人や二人、山林に法を隠して、古道に親しむ好漢も有之べく、千人の稱讃より、此等明眼篤行の人の嗤笑が、まことに考ふべきものと存じ候。

この一文は、今日わたくしどもが拜見しても、感銘並々ならぬものがあります、當時この書簡を頂いた門下生たちの感慨のほどは察するに餘りがありません。

而して、この一文の中には、渡邊先生が平素師表とせられてゐた先徳の名が、はつきりと記されてをりますが、就中、行誡上人は先生の師中の師であつたことが察せられます。いま、賀壽の宴を却けられるに就ても、恐らく、先生の念頭に去來したものは行誡上人の逸事ではなかつたと察せられるのであります。

行誡上人の還暦は、丁度、明治煮案の時にぶつつかつてをりましたから、恐らく賀筵の儀を申出るものもなかつたことと思はれますが、上人が満八十歳になられた際には、法類や信徒から熱心なる申出がありましたそれに對して、上人は、

「法師長壽せりとて、賀筵を開きしたためしなし、經釋にも未だ見及ばず。」

とて、きつぱりと辭退されましたが、やがて、微笑をたゞへて、

「さりながら、元祖大師は、正月毎に一七日の御別行ありし例もあるから、ひとつそれに擬へて一七日の別行を勤め、もつて臨終の行儀に代へては如何であらう。」

と仰せられたので、信徒たちは大はに喜んで、それでは今一度御授戒及び結緣五重の御相傳を願ひ上げたいと申上げ、つひに八十の賀筵にかへて、授戒五重を行はせられたことであります。

渡邊先生は、行誡上人のこの逸事をまねられた譯ではありますまいが、その考へ方は全く相通するものがあると申して差支へなからうと思ふのであります。

三

その他、行誡上人と渡邊先生とを考へ合せて見ると、いろいろの點において、よく似てゐる點が尠くありません。その學風に就いても似たところが多い。その戒律を重んずることもよく相通してをる。物慾を超脱した恬淡たる態度もよく似てをる。また、その風姿の颯爽たるところも、ともに江戸つ子らしい風格を示して遺憾がなかつたが、たゞ一つ、行誡上人が爽快なる唇舌の辯舌をもつてをられたといふのに、渡邊先生は有名なるどもりであつた點が、大きなちがひであつたと申すことが出来ませうか。

だが、渡邊先生のどもりは、一種獨特のどもりであつた、それがまた、先生の一種獨特の風格をかもし出してゐたことをも否定でき

ません。

後でもまた申上げたいと思つてをることですが渡邊先生は、ながい間にわたつて芝中學校の校長をつとめられ、教育家としても實に眞似うべからざる天稟を示されたのであります。従つて、渡邊先生の徳をしたひ、人格の影響をのぞんで、この芝中學校に子弟を托する人も尠くなかつたのですが、さて、入學した新入生が、はじめて先生の修身の講義を聞いてみると、吃音のために殆んど聞きとることが出来ない。中には、父兄から先生の講義をよく聞くやうにと言はれたのに、それが聞きとれないとて、泣いた生徒もあつたほどであります。

だが、それは、ほんの僅かの間のことで、生徒たちは、間もなく、その獨特の吃音の中にすばらしい感銘を發見し、その吃音の中から清新な感激を汲みとることを會得し、またその吃音そのものに大きな懐しみを感ずるやうになるのが常で



ありました。

だから、わたくしども、長い間先生に親近したものとつては、先生と吃音とは、どうしても離して考へることが出来ないものでありますので、つい吃音の話がながくなるのですが、ついでに、もうすこし先生の吃音の話を申上げてみたいと思ひます。

四

渡邊先生は若い頃獨逸に留學して、在獨研究實に十有二年に及んだのですが、その留學のことが決定したとき、先生の友人たちは何よりも先生の吃音のことを心配したものであります。

あの吃音では獨逸に行つても、獨逸語を話すのに困るのではあるまいか。友人たちは先生の留學を祝福しながらも、その點が心配でならなかつたものです。そこで、たぶん高島米峰氏であつたと思ふのですが、一人の友人は、その心配をも



つて、高橋順次郎博士のところへ相談に行つたこともありました。すると、高橋順次郎博士の意見は、日本語は正式に習はないのだから吃るのであるが、獨逸語はどうしても正式に習ひ、習つたとほりに話すのであらうから、大丈夫であらうとのことでありました。ところで渡邊先生の獨逸留學は、前述のやうに、十二年のながきに互つたのでありましたから、その間に、高橋順次郎博士は二度も歐洲に渡つて、故國の友人たちに渡邊先生の吃音の消息を齎らしました。それによると、最初の時、ストラスブルグに行つて渡邊先生に會つてみると、先生は實に立派な獨逸語を流暢に話してをる。そこで、高橋博士は、歸朝のち、高島米峰氏にむかつて、自分の豫

想の適中したことを話したものでありました。

ところが、高橋博士が二度目に渡歐して、渡邊先生の師匠であるロイマン教授に逢つて聞いてみると、

「どうも最近、渡邊海旭君の獨逸語は、まるで分らなくなつてしまつた。どうしてあんなに吃音がひどくなつたのであらう。」

との話でありました。これは全く、高橋博士の豫期せぬところでありましたが、博士はそれを、渡邊先生の獨逸語が進歩して日本語とおなじになつたからであらう、と解したとのことでありました。

だが、渡邊先生は、それはどの吃音にも拘らず、些かも臆するところなく、講義もするし、講演もやられました。殊にその講演は、一種いふべからざる魅力をもつて、聴く者に多大の感銘を與へずにはおかなかつたものであります。

だから、ある有名な雑誌では、渡邊先生のこの訥々たる辯舌をもつて、我が國當代の屈指の雄辯家の中に數へたこともありましたが、わたくしもまた、まさに然りと思ふものであります。

雄辯とは能辯のことではない。たゞ言語發音が流暢であるからとて雄辯とは申されません。能辯であらうと、訥辯であらうと、眞に人をして傾聴せしめ、心をうごかし、感銘あらしめるものこそ、雄辯と稱することが出来るであらうと思ふのであります。その意味に於ては、渡邊先生の訥辯は、まことに稀に見る雄辯であつたと申すことが出来るのであります。

歌壇



與謝野晶子選

久留米 松尾 順
菜種めで山愛で海の青きめで幌馬車はゆく天草の野を

天草島の春の景が浮影にされてゐる春四月ともなれば天草の野は一面の菜の花盛りです。海は緑青色を湛へて島をめぐつてゐる。島山は隠れてゐる。その中を古風な馬車にゆられて行くことは楽しいと云ふのびやかな作。

近江 江きり 女

出でて征く夫は眠れる吾子の手を思ひこめつつ握りしめけり

父親が召されて出立と云ふのに幼児は無心に眠つてゐる。生還を豫期出来ぬ島島立ちであるだけに若い父親の心はさまたまの思ひに満ちたことであらう。無心に眠る赤ん坊の手を握りしめて、それとなく戀情の別れを告げる有様を見て、妻は胸一杯になつてゐる。

東京 川田 邦彦

銀翼に陽の閃きて戦闘機今白雲に隠れむと予る

爽やかな作である。大空は澄み渡つて白雲片々今飛行機が快翔してゐる、あさやかな手並を見上げて作者も共に快い氣持になつたらしい。

東京 川田 邦彦

萩野山の段々墓地に迎火の燃ゆる

萩野山の段々墓地に迎火の燃ゆる

萩野山の段々墓地に迎火の燃ゆる

萩野山の段々墓地に迎火の燃ゆる

萩野山の段々墓地に迎火の燃ゆる

萩野山の段々墓地に迎火の燃ゆる

萩野山の段々墓地に迎火の燃ゆる

夕べを雨來たらんとす

北海道 中村 もん

眼もかすむ沖べはるかにみち潮の浪立ちささはぎ渦のみなきる

長野縣 宮澤 圭子

うつし世はとみに變れど蟲の音の今年もここに吾れをなぐさむ

東京 無名 子

打つ手をば輕くのがれし螢かな流星のごと光引きつつ

大行山討開行 齋 城 奥 流 行

たたなはるこごしき岩根ふみ越えてまつらは共匪今ぞ討止めむ

長野縣 丸山 力 園

召されざる我にしあればいとせめていのちの限り職場守らむ

大阪府 堀江 富光 子

愚かなるわが身なれども君ゆゑに賢き妻にならんとぞ思ふ

東京 細田 初枝

征野なる空ををろがみ日々のわざ

征野なる空ををろがみ日々のわざ

征野なる空ををろがみ日々のわざ

征野なる空ををろがみ日々のわざ

征野なる空ををろがみ日々のわざ

征野なる空ををろがみ日々のわざ

つつしみ強く生きんとぞ思ふ

秋田 小崎 蓮 葉

日の光烈しく野邊を照らせども夕べの風に秋ぞしるる

福岡 白谷 は ま

乏しきに耐へて子と食ふ朝餉にはあらずも樂しかりけり

水戸陸軍病院 鈴木 泰 助

生きぬかん希望はげしく胸に焼ゆ病のかろくなりゆくがまま

北海道 寺田 頑 山

思ふこと数ある中のひとつなる二百日日は無事に過ぎゆく

北海道 湯島 軍人 療養所 前野 賢一

長旅のつかれを云はで父上はわが病のみ問ひ給ふかな

久留米 江上 菱 花

一億のこの人たちの残りなく死ぬる日のあり諍ひ止めよ

京都 永田 七 郎

兒の病めば心亂る思ひあり彌陀に任せて一寸ちに行く

京都 白峰 敏 夫

萩叢にわれ伏し居れば擬装せし帽子に蟲の跳び移りけり

野外演習 東京 森田 法 晃

ちろろ蟲鳴くとき闇の這ひ上り心

ちろろ蟲鳴くとき闇の這ひ上り心

ちろろ蟲鳴くとき闇の這ひ上り心

ちろろ蟲鳴くとき闇の這ひ上り心

ちろろ蟲鳴くとき闇の這ひ上り心

ちろろ蟲鳴くとき闇の這ひ上り心

ちろろ蟲鳴くとき闇の這ひ上り心

ちろろ蟲鳴くとき闇の這ひ上り心

いみしく澄みてゆくかも

北海道 花田 隆 往

この秋は夜な夜な荒れてふる雨の心にかかる畑や田の面や

石川縣 西村 澄治 郎

うつし世の神ながらなる母の愛八十路に入りて茶摘みて賜ふ

大阪府 中廣 謙

夏の夜を一人寝る身の苦しめて起き出でて見ぬ天の川瀬を

栃木縣 大崎 云 海

稻の穂の赤みを帯びて靡きつつ田の面は深く暮れてゆくなり

堺市 笠井 松 枝

しづかなる室にこもらひ湯のたぎる鐵瓶の音に心落ちつく

奈良縣 寺田 惟 牛

迎火に歸りし人の跡にして芙蓉は高く咲きつづくなり

兵庫縣 水谷 良 子

み佛に供養せんとて水に入り蓮を切れば蛙の血を吸ふ

愛知縣 志賀 静 江

晩秋登出づる先出ち盂蘭盆會早く行ふ村の習慣

愛知縣 志賀 静 江

投稿規定

投稿規定

投稿規定

投稿規定

投稿規定

投稿規定

投稿規定

投稿規定

法然上人和歌註解

(八)

安西覺承

露の身はこゝかしこにてきえぬ
とも こゝろはおなじ花のうて
など

〔通釋〕 結んではやがて消え失せる露のやうにはかないのが人の身の上です。今あなたとお別れしてはかない肉體はお互に此處と彼處と相隔てたまゝ消え失せてしまふとしても、必ず心は同じみ佛のみ國に生れあはすこと、同じき生の歡びに、假の別れの淋しさを決してお歎きなさいますな……。

〔註〕 これは勅修傳卷三十四に出てゐるもの

で、建永二年三月上人が讃岐へ流されたとき月輪殿九條兼實が名残を惜しまれて、

ふりすててゆくはわかれのはしなれどふみわたすべきことをしぞおもふ「この私を都にふり捨てて配所にいらつしやるのは永の別れのいとぐちではあるけれども、(端に橋をかけてゐる)橋は物を渡すもの、文を通はせ消息を聞くことのできるのをせめてもの慰に思ひます」

と詠んで送られたのにお答へになつた歌である。優しくて而も強い心持が一流の快調に乗つて、ふんわりと而もきつぱりと讀む者の心に迫る。いかにも上人を偲ぶにふさはしい

實話 楽しい満員列車

これは或る人から聞いた話である。かりにAさんとしておかう。

そのさんAが處用のために東京驛から東海道線に乗り込んだ。合體と車中は文字通り詰つめて座席につくことの出来ない人が澤山ゐた。Aさんもその中の一人で相當の年配ではあるし、長い旅行を立づめでは：とがつかりしてしまつた。ところが、汽車が動き出すと、Aさんのすぐ傍の座席に坐つてゐた二人の學生が何かしきりに相談してゐるやうであつたが、立つてゐるAさんに向つて

「どちらまでおいでです。」と聞いたので「大阪までです」と答へる

と「それでは立づめでは大變でせう。私たち二人と立つてゐる貴方たち二人と、一驛毎に交代で座ることになませう。横濱にいたら私たちが立ちますから、貴方たちがお座りなさい。そして大船へついたら私たち

お歌の一つである。

◇

いけらば念佛の功つもあり 死なば浄土へまゐりなむ とてもかくても此身には 思ひわづらふ事ぞなき

〔語意〕 ○いけらば 生きあらばの約、生きてあるならばの意。○まゐりなむ 勅傳に「まいりなん」とあるがいま正した。なむは完了を豫想する言葉。參つてしまはうといふ程の意。○とてもかくても どうしてもかうしても、いづれにしても。

〔通釋〕 この世に生きてをれば、生きてゐるうち稱へ止まぬ念佛の功德は積るばかりであり、さて死ねばとて、必ずやかの念佛の國に生れ參じ永遠の命を得ることであらう。いづれにしてもこの身には思ひわづらふ事とな

い。

〔註〕 これは勅修傳卷二十一「上人つねに仰られける御詞」の中に出てゐるものであるが、見らるゝ通り七五四句の韻文であり、一首の今様歌を成してゐる。死生ともにわづらひなき念佛者の心持を要領よく經綏結構を整へた立派な今様である。上人が常に仰せられた詞として出てゐるところに一層の重みがある。今様歌としての作爲的なものは何等このお歌に感ぜられず、寧ろ口から流れるやうに出た聲がおのづから七五四句の形式を成したといふやうに、極めて自然な、不動の信念の流露としていたゞけるところに有難さがあると思ふ。終

後記 以上でもつてこの註解を閉筆する。最初擧げた二十首のうち十二個條間答末尾の歌は多少疑點もあるので省いた。執筆中筆者身邊に故障が多く掲載斷續の甚しかつたことを讀者にも編輯者にも深くお詫びする次第である。——筆者。

が座つて貴方がたが立つたらよろしい。かう云ふ風にして行つたらどうでせう。」と提案した。この學生たちの氣の利いた、そしてまことに親切な申出にすつかり感心しかつ喜んで、Aさんは「それではさう願ひませう」と賛成した。

ところがそれを聞いてゐた向ひ側の座席を占めてゐた二人の人たちも、

「では、私たちもさうしませう」と云つて傍に立つてゐる二人の見知らぬ人に同じやうな申出をした。そして、この四人づゝ二組合計八人の人たちが一驛ごとに座席を交替すると云ふ美しい人情のあふれた集團行動を實行しはじめた。

するとまたこれを見てゐた向ひ側の座席の四人の人たちも相談し合つて、他に立つてゐる四人の人たちに同じやうな一驛毎の座席交替を提案した。そして遂に八つの席に十六人の人達が樂しげに交替で座ると云ふ、ともすればとげ／＼しくなり膝かな満員列車に美しい情景がくりひろげられた。「全く感心しました。愉快な旅行でした」とAさんは云ふのであつた。

隨 感

白道に精進せよ

大正大學
教授

佐 山 學 順

善導大師觀經疏散善義のなかに二河白道の譬がある。ある旅人が、ふと右を見れば濁水滔々として果しなき大河奔流に當に此の旅人を飲まんとして居る。左を見れば劫火焰々として、此の旅人を燒かんとして居る。旅人は進退これ谷まりゆくにゆかれず、歸るに歸られず水火の難に死の運命をまつのみであつた。所がよく見れば水火の間に向ふ一筋の白道がある。この時、東即ち後の方に聲ありて、「汝旅人よ一心正念にして其白道をまつしぐらに西に向つて進め必ず汝は救はるゝであらう」又西の方に聲ありて「汝旅人よ、たゞ一心にその白道に従つて西方に來たれ汝は必ず

救はれる。更に又後の方に大聲あり「汝旅人よ「こちらに引き返せ、あぶないぞ、殺されるぞ一刻も早く還つて來い」と、そこで旅人は、とやせんかくやせんと迷つたが、最後に決斷して其白道を、わき目もふらず西に向ひて往きしに果して救はるゝ事を得たりといふ。

此の譬は、旅人は人の一生である。水の河は、貪慾、火の河は瞋恚である、多くの人生は別に目的もなく、食ふて眠て一生を過ごし終つて怒の中に身を亡ぼして居る。省れば過去は茫々として夢の如く未來は全くお先き眞暗である、後に聲あるは釋尊發遣の御聲であ

其の一念

佛



療 養 所 物 語

和 良 木 鈴 所養療〇〇

酒井さんの居る個室の三つ目の隣に岩井さんと云ふ病友が居られます。こゝに附添ひとして七十歳の祖母さんが看護して居ましたが、私が時々酒井さん（前號掲載）ある病兵の手紙の主人公を訪れて例に依つて二人で信仰談をするのに、酒井さんが耳疾で耳に故障がある爲に、大きな聲で語り合ふので、何時もこの祖母さんが戸口にたゞずんで私達の話を聞いて居るのでした。初めのうちは私も氣にとめないで居ま



「願往生の心を懷いて一向に西方に行け」と西方の聲こそは願王彌陀如來の救の聲である。願往生の白道を一心正念、餘所目もふらず來たれ、我汝を救はんとの大慈大悲の召喚の御聲である。今一つの後方の聲とは人の世の異學異見、即ち謬まれる考、自分勝手の心、煩惱妄念の姿である。人はたゞ願往生の決心を以て慈と瞋の二河の間、白道に專進する所に彌陀大悲の救がある。

今我が日本の進む姿に二河白道の眞理がある。我が日本は八紘一字の彼岸に到る白道に

邁進して聖戰茲に四ヶ年餘、着々と理想に向ひつゝあるが一方に水の河とは共產ロシア及び蔣介石の我慾をいふ。火の河とは英米等の小我的憤怒である、眞の日本精神は白道に精進せよと叫ぶ、理想の聲は八紘一字の白道一心一向に來たれといふ、然るに無自覺の國民中、異學あり異見ありて、戰爭はいやだ、早く止めてくれればよい、物が無い不自由である一日も早く我が子我が夫が、歸つて來るやうになど、煩惱妄念の聲があるやうでは八紘一字の理想實現に專念する日本に取つては由々しき大事である。たゞ我々は東亞共榮圈實現の正義人道に立つて開闢以來の傳家の寶刀をひつさげて唯一の白道に邁進し、水火の難あらばあれABCの策動妨害も起らば起れ、斷乎として白道に進むことが我日本の尊い姿である。

したが、何時もさうなので何時とはなく親しみを感出し、お互ひに微笑をかはすことにもなつて居たのでした。あとできいたことですがこの老婦人も浄土信者だつたのです。

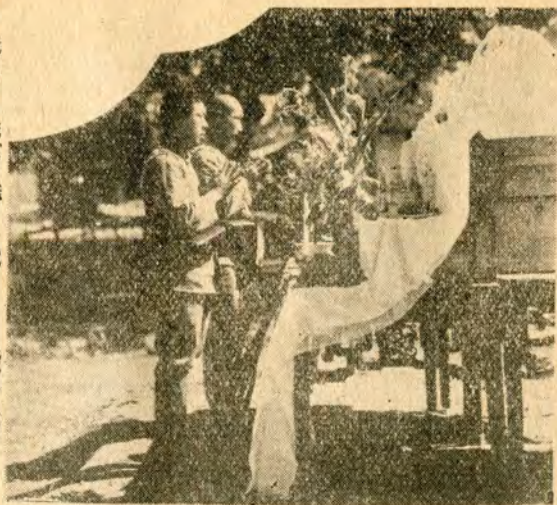
その中に病勢が悪化して親戚の方や兄妹の方々が來訪されて居ました。

ところが或る朝、酒井さんからの手紙が來て「岩井さんの處から法然上人像を拜借させて呉れとの事だが、そちらのを借してやつて呉れ」と云ふのでした。それは今朝祖母さんが酒井さんを訪れて涙の中に「孫も若いのでお念佛のことを話しても餘り理解して呉れませんでした、昨日苦しい中から突然

「お婆さん！ お念佛／＼」

と申しますので、唯今まで枕元で念佛して居たのです。それで慇懃いけないうですから

「お前は佛様と一緒に往くのだから何も淋しいことはありませんよ」



墓標

：東 滋

をととのへるのも勿々に銃をうばひとり
あはたよくかけだした。急速調にひ々
く軍靴の音が、荒れ狂ふ波のやうに聞え
た。

月のない夜だった。まつくろい闇が
らだにねばついて、一寸先も見とせな
かつた。前の者にくつついてたど走らば
かりである。

漫々たる東江の流れに面して、一本のま
らしい墓標がたつた。筆ふとく故××上等兵
之墓と書いてある。

昨夜のことである。治安も確立され、やう
やく静謐になつてゐたこの町に、突如けたた
ましい銃聲がひびいた。まどらかな夢をむす
んでゐた私たちは、非常呼集をうけた。軍装

銃聲はしだいに激しくなる。交戦場所は東
江の岸あたりらしい。岸までは十二三丁はあ
る。急をつかれて苦戦してゐるにちがひない
七八名の衛兵の姿が、私たちの頭をちらちら
かすめる。十二三丁の距離がじれつたいほど
遠い。

と言ひましたら

「ウン、ウン」

と頭を下げて呉れました。せめて一目だけ
でも「法然さまを拜ませて遣りたいと思ひ
ますから是非肖像を借して下さい」と云ふ
のださうです。

それで私の法然上人像を貸して上げまし
たが、酒井さんはそれへ「阿彌陀如来一の
像も一緒に貸して上げました。

かくてその重態の岩井さんは阿彌陀様、
法然様の像の前で、祖母さんの念佛の聲に
和して唱名しながら如来様の御來迎に依る
尊い往生をなさつたのは八月十九日の午後
十一時頃だったとのことです。

そしてツクツク考へさせられましたので
す。誠に理論ではない。事實だ生活だと思
ひました。今更ながらのやうに中村先生の
お教をハツキリ、らせて頂きました。岩井
さんは祖母さんに依つて正念往生が出来た
ことは本當に尊いことです。祖母さんは孫
の岩井さんの爲には本當の善知識だったの

小さな家のぎつしりならんでゐる露地をくねくねかけて、大通りに出た。他の中隊の兵が既に前方をかけてゐる。と、後から一團の兵隊が脱兎のやうに走つてきた。警備隊の各中隊から一せいにくり出されたのだ。無数の軍靴のきしる音が一つにとけて、闇の中にざざつ、ざざつと異様にたかくひびく。けたまわしい小銃の音さへいくぶんうけすやうである。さきほど、波の音のやうに聞えた軍靴の響きは、私たちだけのものではなかつたのだ。

私たちが着いた時は、すでに敵は小舟を操つて川を退却中だつた。先着の兵隊は堤防や船つき場に伏せてさかんに猛撃してゐた。中には船をくりだして追跡しようとしてゐる者もあつた。

『まつくらだ。今夜はよせい。地の利にくはしい敵兵にしてやられるぞ』

隊長のおしとめる聲がするどく聞えた。時敵の彈丸が、びゅつ、びゅつと飛んできて、がちりと道に落ちる。まつくらな中に激しい

うち合ひがしばらくつゞいた。状況はまつたく不明だつた。水の中に落ちる彈丸のしぶきが、私たちをいらいらさせた。月があつたら、川がなかつたら、みすみすうちもらしはしまいものを……。

この戦闘で××上等兵は不幸にも戦死したのだ。彼は事變勃發とともに召集され、中支から南支へと歴戦した古強者だつた。すでに歸還命令もでてゐた。

『負傷一つせず歸るのがもつたいない。先に歸るのがすまない』

と口ぐせに隊の者に言つてゐたさうだが、これでまた子供にもあへると、近しい人にもらしてもゐたこともあるさうだ。そして、最後の御奉公だ、勤めるだけはたらくぞと、一日中、元氣一つばいで軍務にはげんでゐたといふ。その日も、もう歸るんだからいゝぞと、分隊長に言はれるのに、無理に衛兵係を志願してゐたのだつた。

午前二時ごろ、彼は若い兵隊をつれて巡察にでた巡察にはかういふ所を見てあるくんだ

です。

其の二 空

酒井さんの部屋の真中に電燈が下つて居て、その中央にコードがたぐねてあり、そこに「空」の一字を書いた紙がはり付けてあります。これは此の部屋で以前に他界された或る療友の残して行つた筆蹟であります。

今もその儘になつて居て、私達の回向心の指標となつて居るのですが、酒井さんも私も

「こゝに生ける佛あり」として敬虔な氣持で何時もそれに向つて祈らずには居られないのです。何う云ふ信仰を持たれ、何う云ふやうに往生なされたか、その内容は知る由もありませんが、何かしら私達の魂を呼ぶものがあつて何かにつけて私達を指導して呉れてをります。これも私達への尊い縁として有り難く感じて居るものであります。

ぞと、若い兵隊に教へながら、東江の河岸にあらはれた。河岸ぶちに沿つて船つき場の方へ歩いてゆくと、ごそごそいふ音が聞える。へんだぞと若い兵隊に耳うちしながら、じつとき耳をたてると、さくさくといふ足音だ。はつとおもつて無意識に懷中電燈をつけた。殘敵が船つき場からぞくぞくあがり、先の方はや町の中へはいつてゐる。しまつたと叫んだときには、もう敵は小銃のひきがねをひいてゐた。ぼん、ぼん、ぼん、つゞけさまに鋭い銃聲が深いしじまをやぶつた。彼はとつさに家の壁に身をよせると、若い兵隊をひきよせて、

『こゝは俺ひとりで大丈夫だ。衛兵所へ知らせてこい』

と、どなりつけた。それが彼の最後の言葉だつたらしい。兵隊がかけつけた時は、もう冷たくなつてゐた。

朝になつてやうやく、私たちは、大通りや河岸にごろごろ轉つてゐる敵兵の死體を見出した。ほとんど多くの者は煙草をポケット

に一ぱいつめてゐた。ちかくの煙草屋から掠奪したものだ。この町を我軍に占領されて、向ふ岸に逃げはしたものの、物資の道をたゞれて困つたあけく、闇夜を利用して潛入したものらしい。船つき場の小船のあひだには、水ぶくれになつた死體も五つ六つ浮んでゐた。我軍の被害は負傷者が五六名、それも輕傷ばかりである。戦死は不幸にも××上等兵ただ一人だつた。

『歸らうといふまぎわに死にやがつて……』

墓標をたてながらつぶやいてゐる兵隊があつた。目はかすかにうるんでゐた。

『こゝに墓標をたてよやれば、彼も満足してくれるだらう。』

名もない草花を手折つてきた兵隊が、墓標をじつと見つめてゐた。

『なにも運命だ。運も悪かつたが、彼はかへつて喜んで死んだかもしれないぞ。口ぐせに言つてゐた最後の御奉公をりつげになしとげて……』

『うん、最後は飾つた。その武勳を記念する』

其の三 罪が深い！

療友安藤仁郎伍長君も八月二十四日夜九時半に他界されました。

安藤君も重態でありましたので、そのお母さんが看護に見えて居たのでした。

私は先生からの御指導に依り本當の信仰を念願して居りますので、何時も私を力にして居て呉れて居たのでした、二十四日の夕方、お母様から「危篤一の報せを受けましたので、すぐその病室に参り九時半大往生をするまで、一緒に念佛したのです。病友深木信一君も共に致しました。

逆も苦痛のやうでしたが、夢我夢中でもよく口稱念佛されて居ました。絶體絶命の中、一念一念に手を合せて佛と共にその苦しみに耐え忍んで居られる有様は實に氣高いものでした。

私は私の念珠を手にかけてやりました。彼は嬉しいと見えて、念佛の中から時々笑を浮べられます。全く人事とは思へません。

この墓標が、我々のせめてもの回向だ』
 二人の兵隊が土をふみかためながら靜かに語りあつてゐた。彼等はなにをおいても、この墓標をたてずにはをれなかつたのだ。骨は埋めなくとも、戦死した戦友の靈は血を流したところにある、彼等はさう信じてゐた。たてをはると、彼等は草花を供へ水を獻じて、長いあひだ頭をさげてゐた。
 朝のやはらかい陽ざしは、東江の漫々たる流れに琥珀色をどつてゐる。空はあくまで高く、乾ききつた空氣はあくまで明るい。殘敵がひそんでゐるかもしれない對岸のパナ晶はくつきりと見え、涯しれぬ緑の原が地平線のかたにかすんでゐる。船つき場では、小船から中國人がしづかに降りてゐる。避難先からどつてきた人たちらしい、一々兵隊検査をうけてから去つてゆく。その小船の横には發船を待つ船が三四隻、長い煙管で氣ながに煙草をふかしてゐる中國人をのせて、浮んでゐる。昨夜の戦ひなどはまったく知らぬげである。

私は墓標の前に進んで行つた。墓標をたてた兵隊たちもうゐなかつた。さうやかな草花と水が、鬼をもひしぐ兵隊のやさしい心をしのばせて、つゝましく供へてあつた。それは人間の死をこともなげに見すてやうとする冷酷な自然に對する抗議のやうでもあつた。私は昨夜の戦ひをはつきり目にうかべてゐた。××上等兵がぼつたり倒れた瞬間を、この目でぢかに見たやうな氣もした。歸還を前にして戦死したことにおもひいたると目がしらに熱くなつた。しかしこれが兵隊といふものだ、胸の中でさすやうな別の聲がひびいた。悲壯な覺悟をうながすやうに墓標がせまつてきた。
 私はふと戦跡のいたるところに林立してゐる墓標をおもひうかべた。それは故一等兵戦死之墓、或は故伍長戦死の地などと書かれてゐるが、かならずその前には草花が、草花のないところでは煙草や乾パンが、供へられてゐた。戦歴の短い私には、それは珍らしいものであつた。しかしいま、私はそれらがたて

そのうち「お母さん」と呼びました。暫くして
 「……俺は罪が深い……」
 と、二口申されるではありませんか。
 私は何と言つたのかハッキリ覺えない位でした。私の頭の中は法然上人の御言葉がグルグルと颯々めぐるのでした。私は強く胸を打たれながら申しました。彼は今こそ救はれたのだと思つたからです。
 「判つた。イヤそれが、それを言はして呉れたのが、佛様が救つて下さるその慈悲と云ふものだ。お詫びも何も無い。誰も彼も罪深いのは同じだ。唯だ御佛の——自分達のいのちのみ親のみ名——念佛さへすれば救はれるのだ。唯だ念佛さへすれば助けて下さるのだ。何でも彼でもお任せして、唯だ念佛と共に、如来様におすがりして居て呉れよ。それでよいのだ。そしてその苦痛を忍び、それも佛様にまかせろのだ。佛様を手を握つて居て呉れる。自分達の生命を握んで居て呉れる。イヤ唯だ念佛だけだ。

られた時の光景を、はつきり臉にうかべるこ
とができた。そして、たてずにはをれない兵
隊の氣持を一點のくひちがひもなく知ること
ができた。兵隊こそ死して生きる生命の祕義

☆陸海軍病院慰問淨土寄附者芳名(敬稱)十月分

(をはり)

を身うちに體得してゐるものであり、心から
英靈の前にぬかづき得るものであつたのだ。
私は墓標にむかつてふかく頭をたれた。

さあまた念佛しやう。誰も同じやうに佛様
が自分達のいのちなのだから……
と申しながらまた念佛を續けました。
御本人ももうなづいて一生懸命によく稱名
を續けられました。

そして酒井さんの阿彌陀如来を借しても
らつて枕元に並べました。私達は魂をう
ばはれたもののやうに一心に念佛しました
その内、聲が止まりました。午後九時半。
正しく稱名の中に息を引きとられたのです
お母さんも涙の中に唱名され、またそれ
を喜こんで稱名されました。

生前に多趣味で藝術家でした。餘り何回
も話はしませんでした、よく判つて呉れ
るのでした。

『念佛に依つて誰も彼も救はれる。』

こんなに有難い感銘を受けたことはあり
ませんしだ。

一圓二十錢 山口縣阿知須町 田中 茂子
二圓 埼玉縣松山町松山城 恩 寺
一圓二十錢 横濱市神奈川區澤渡八城 千代
一圓二十錢 下谷區中清水町 歌代 萬津
一圓二十錢 鳥根縣都野津町 田村 德行
(天津日界明石街 天津寺扱) 各一圓

淡路街 樋口 せき
西安島街 森川きん子
須磨街 長谷川ハル
福島街 三文字司や子
榮 街 深谷ふじ子
明石街 小橋 貞子
呂緯路 黒川嘉一郎
鐵路省 松岡 隆一
天津寺 瀧澤 孝道
天津寺 安部 觀道
脇本直治郎

一圓二十錢 京都府綴喜郡田原村郷ノ口 極樂寺
一圓二十錢 世田谷區玉川町一五八五 家村セイ子

一圓二十錢 廣島市臺屋町源光院柳 亮 信
一圓二十錢 八戸市大字新荒町 瀧澤 三郎

二圓四十錢 福井縣敦賀町神樂九四 吉川 汀巖

吉川 汀巖

一圓二十錢 奈良縣高田町 脇本直治郎



東京市 森田 法晃

秋風の沖より夜がよせてくる

評 葉香から夜にはかきつくる海的光景が
落ちつた静かな心に舞と迫ってくる
ものがある。此の秋風は風そのものと
してよりも季節として感じさせる。

島根石見 千翠

山寺の蕨蚊は僧に馴れてとふ

評 蕨蚊の騒々しい位群がてゐる中に、
お僧が平氣で讀經でもしてゐるのを見
て斯く表現したのもかも知れない。「僧
に馴れてとふ」は面白い見方である。

岸和田 田中 秋芳

七夕の短冊つりて蕨の家

評 非常にちなみな表現であるが滋味あふ
きものがある。我等の家と異つて、家
のまはりの竹藪に美しい七夕の短冊を
数多つてゐるといふのである。如何
にも自然なのがよい。

東京市 椿

秋晴の甲斐の山とてせまり来る

飯田市 宮瀬 榮子

八百屋ともなりて芋うる寺の秋

板根 仁 阿 彌

鐘の音の聞けはきかれて盆供養

姫路市 山本 一 晋

襟雨に救惜む燈をともしけり

深川區 細田 初枝

學問を離れし今日の夜長なる

栃木縣 大輪 云海

蜻蛉とふ羽管に夕來りけり

大分縣 石堂 柑山 生

苦瓜の熟るゝを食うて子等の幸

滋賀縣 美船 横智子

柿の實を烏はむ日は空澄みて

北海道 花田 順 往

しをれゆく草木にもしる暮の秋

宮城縣 菅 原 漢子

さみしさに締る心や虫の聲

富山縣 佐伯 禪 祐

裏庭をまもりて赤き鳳仙花

山口縣 山本 登 天

蜻蛉の廢園たゞに廣うして

北海道 前野 賢 一

秋もはや朝より空の澄みわたり

富山縣 内山 儒 堂

洗ひ場に緋鯉よりくるや水の秋

品川區 伊東 敏子

夏はゆく夏はゆくとして蟬なくか

福岡市 高柳 噴 水

夕焼をまともにしたる荷馬車行く

堺市 笠井 松 枝

枝に蛙刺したる百舌鳥の獨りなく

京都市 愛登 紅 芽

病室に今は消えゆく大文字

久留米 松尾 順

天草や天が下みな菜の花に

滋賀縣 重野 ふみ子

篋の風がこぼれて萩の寺

京都市 永田 七 郎

誘蛾燈三日月落ちて眠へる

大和寺 田定 信

うるはしくお盆に次げる芙蓉かな

同 佐和 宏

虫の聲ひとり夜空をこめにけり

兵庫縣 森野 瑞月 峰

うたふねや螢よふ露に遠く居て

栃木縣 大輪 清

病人へ薪割響く秋の暮

青森市 高松 英 紀子

赤蜻蛉おちつき見せて夕焼けぬ

東京府 船津 定 祐

萩の雨すがくしくも暮参かな

深川區 清水 貞 水

爽かな翠ゆかたに庭の松

開成區 渡邊 一 念

月見草よけて急ぎぬ鮎の宿

同 渡邊 貢子

虫の音にしたしみながら月見かな

深川區 細田 初 枝

青蚊張の頬にふれきて秋に入る

名古屋市 堀場 典 造

秋燕の憩へる尾より雨しづく

高橋縣 林 良 俊

河舟の人まちはほに秋の風

小樽市 中村 も ん

虫時雨更けゆく月を領しけり

同 平井 正 念

刈草と囁かにや指導標

東京市 みの る

甲斐の山しぐれて家路近づきぬ

久留米 江上 菱 花

朝顔の今日咲きいづる花に雨

東京市 無 名 草

湯の宿の浴衣すゞしき尾花かな

投稿規定

官製はがき一回二句以内
とし「俳壇」編輯部併置
係あてに送ること。



續

小庵にて

子母澤 寛

一

いつもの年は、學校がはじまつて、
 とも達が鵠沼を引上げるのと一緒に
 私達も歸京するのだが、ことしは、少
 し緩りして行きたいと云ふので、老妻
 と只二人が鵠沼の小庵に秋を味はふこ
 ととした。

ほんの三間より小さい小なところへ
 たゞ二人になつて見ると、まるで私達
 二人が、これ迄とは別な世界にでも移
 り變つたやうな氣持がさせられる。夏

の間は、庭の芝生へ椅子を持出して二
 人の男の子と私達が圓くなつて、いつ
 迄もいつ迄も月を見てゐたり、星の話
 をしたりしてゐるのだが、たつた二人
 になつて、月を見るのも、星を見るの
 も、われ乍ら痛ましい位に淋しいもの
 である。

日常、東京に生活してゐると、天と
 いふものが、そんなにはつきりと強く
 印象に残ることは餘りない。けれど
 も、鵠沼あたりの庭に出てゐると、本
 當に、われ／＼は天の下にゐる、天と

いふものがすぐ自分の左右からつらな
 つてゐるものだといふ事が、まざ／＼
 と感じられるのである。

二

ゆうべは丁度、満月のお月見であつ
 た。老妻は、女中と二人で、林檎やら
 栗やら柿やらを求め集めて盆へのせ、
 薄を立て、電燈を消して、縁側へ蠟燭
 をともしてお月見をした。東京の家で
 も、同じことをやつてゐる筈だなどい
 話しながら、縁へ座つて、いろ／＼な

話をしていると、老妻が、ふと「姉嬢が赤ちやんを産みましたから、いよ／＼あたし達もおちいさん、おばアさんでございますね」と云ひ出した。

「そうだなア、それでもまアこれ迄には、ずるぶん貧乏もしたし苦しい事もあつたが、とにかく人間おちいさんおばアさんと云はれる迄生きてゐられる事は目出たいなア」と私が云つたら「本當にあなたも、ずるぶん御苦勞でございました、でも、まだ／＼でございますよ、三人の俸が大學を卒業す迄は、お氣をおやすめなされては困ります。もう少し働らいていたゞかなくてはなりません」などといふ。

三

「それアまア樂隠居でもあるまいさ、働らくのはいいが、何にかかうもつと

心を静かにしてゐたいね、私は毎日小鳥を自分だけで面倒を見てやる位の氣らくさがほしいのだよ」然う申され、近頃は、そんなに澤山お書物をなさいますのに、何にかと忙しくて、小鳥の世話も女中におさせになる事もございませうからね」さうだよ。これが俗事多忙といふのだね。わたし達も段々年をとつて、娘たちが嫁に行つたので俄かに親類が出来た。その縁故でまたいろんな人とも知合になる。これ迄は、云はゞ老書生の生活みたやうなものであつたのが、近頃になつて、はじめて世間並になつて來たのだねえ」仕方がございませぬ。それがどちら様でも皆さん踏んでお出でなさる道でございませうから」そんな事を話してゐると、東京から電話が來た。老妻が暫く話し

てゐたが「まア仕方がありませんねえ、それではお蕎麥でもお上りなさい」といつて「お休み」と電話を切つた。

「龍一が生まれてね、おとうさまもお母さまもお月見をしてゐられるんでせう。こつちはもうお月様の御馳走がみんな無くなつちまつたんだけど、弟たちがまだ何にか欲しいといつて仕方がないからと申すんでございますよ」子供達もいゝお月見をしてるんだね」「さようでございますよ。でもむかしから名月に月なしとやら申しますのが、ことしの名月は本當に雲一つない空で」娘たちを嫁にやつてから、少し淋しそうな様子の見える老妻が、月に照らされて、私と話しながらも一しほ淋しそうであつたのを、いゝ時に俵が電話をかけてくれた。

老妻は俵の聲をきくと俄かに元氣づ

いて來たやうであつた。

四

ことしの春、私の友人は銀婚式といふのをやつて私たち夫婦も招ばれて行つた。大勢の人でするぶん賑やかであつた。だが私は別に改まつた祝辭も述べなかつた。夫婦の生活を二十五年だの五十年だのと區切つて考へることが少し妙だと思つてゐるからである。俗に夫婦は二世といふことがある、この世ばかりでなくあの世へ行つてもといふ意味であらう。それをたつた二十五年一緒に生活したからとて祝ふが程の事もないだらう、所詮は、ある男と女とが永遠の結びつきが夫婦である、何處までも何處までも、先きの知れない年代を共にして、それで當然なのである。

私たち夫婦も、とつくに、その銀婚の年代を過ぎたが、考へて見れば、人の世といふものはするぶん山坂の峻しいものである。私たちは、田舎の風習で早婚であつた。私がまだ九十圓位の月給を貰つてゐた頃に、もう子供が五人あつた。するぶん生活は苦しい。だから、もう上品ぶつてはゐられなかつた。

私の親しい友の一人は、お前さんは若い頃はひどく利己的な人間であつたが、この頃はまるで變つたなアといふ。私には變つたかどうかからない。が、いゝ鹽梅に、五人の子の二人は片づき、長男も、もう少しで學校を出ようとしてゐる。そんなに苦しい辛い思ひをしなくて、どうにかその日の事に缺かぬうになつたから、いくらかは、私といふ人間も、己れといふものを離れる事が出來てゐるかも知れない。凡人は、まづ己れを先きにする。だから、己れにこだはつて、知らず知らずの間に、世にも醜い姿を人様に見せるものであらう。私は若い頃は利己主義であつたといふ友人のことばは甘んじて受ける。が、人生五十未だにその迷路にゐるならば、それこそ私は心から恥づべきだと思つてゐる。

五

私の鵝沼の小庵には、粗末ながら弓場がある。弓場といつても、ほんのささやかなもので、あづちだけを拵へて貰つてあるのだが、塗弓の嫌ひな私も弓をひく次男も、素木のものばかり持つて來てもう二張も三張も痛めて終つたので、近頃は、私もここでは減多に引かない。この頃は、いゝお天氣の秋晴

れの日がつゞいてゐるので、その青い空の下で、弓を引くのはいいものだけれども、やつぱりやれない。まだ娘たちのゐる頃は、一家七人が一人残らず弓をひいた。姉嬢もうまかつたし、次男もとう／＼本物になつて終つた。来年は、はじめて年齢が出来るので鎌士の試験に京都へ行くのであらう。四段になつたのは十七の春である。

今日は、珍らしくその弓場の前あたりを老妻が掃除をしてくれて「お引きになつて見ましたら」といふ。引いて見ようかね、どうせひどい事になつてゐるだらうが、私は、一番弱い弓を持出して、すゐぶん久しぶりで引いて見た。所詮、うまきは引けない、何處となく自分のからだに逆つて行く弓の力を、自分の物にする事はとう／＼出来ず終ひで引終つてしまつた。「駄目

だねえ、やつぱり」「それでせうかしら。わたしにはわかりませんが」「いや悪るいんだよ、あゝしてぼん／＼當るのが悪るい證據さ。こんなに幾月も引かずにゐて、當る譯がない。當たらないのが本當。それが當るんだから、わたしは、何處かでひどく無理をしてゐるんだよ。御覽な、右の肩が、こんなにこち／＼になつて終つたよ」「まあ」次男が側にゐたら、私のこの論をどうくつがへすか知らない、が私はやつぱり稽古をしない弓が當たるのは、不自然だ、何處かに拵へごとがあるといふ説をとつてゐる。

六

て一つ美しく咲き出したのを見て「咲きましたねえ」と私をふり返つた。百舌鳥が高い木の上で叫ぶやうに鳴いて行く。青い空の下に、ぼつちりと咲くコスモス。

私はまた二人の娘たちを思つた。あの二人もそれ／＼の家の庭に、きつと秋の草花を植ゑてゐる事だらう、そして、その花が、丁度この花のように、咲き出して、二人とも、わたし達を思ひ出してゐるかも知れない。二人とも親思ひで、優しい娘たちだから、きつと、ゆうべもお月見で、ふた親を思出したに違ひなからう。「え、どうだらうね、東京へ戻つて一と仕事したら、娘たちの處へ行つて見ようかねえ」「ほゝ、行きたくても、何分にも青森と神戸ではどうにもなりません」「うむ」遠いところへやつて終つた。

あづちの矢を拾つてくれ乍ら、老妻は、娘たちの植ゑてくれた花壇のコスモスが、秋の日を浴びて、今日はじめ

がこれ以上、私が何にか云ひ出すと、老妻は、自分も同じ事を思つてゐながら、私一人を子煩悩にして終ふから、私は、そのまゝ口をつぐんで黙つて終つた。

妹嬢が嫁入つた時の話である。娘は、女學生の頃から持つてゐたいろ／＼な人形を、改めてお祝に友人達からいたゞいたものと一緒に、さゝやかな嫁入荷物の中へ入れて行つた。荷物は直接神戸へ送らず、一旦東京の御両親のところへ送り、ここからまた荷作りをして神戸へ出したので、娘が神戸へ行つた時は、その人形は一つも来てはゐなかつた。後できくと見ると仲人さんが、荷物のお手傳をして、これから人生の第一歩を踏出さうといふ時に人形どころではないでせうといつて、東京へ置残したものである。老妻

は、「あの子が可哀そうに」いつたうでも仲人さんの云ふのが本當かも知れないよ、これから夫婦腕を組んで世の中の荒波と戦ふのだ、云はゞ必死の覺悟でなくてはならぬのだから、人形は惡るかつたかも知れないね」「ですけれども、そんなに世の中つて窮屈でなくてはならぬものでござりませうか。やつぱり女はどんな場合に立つても、人形を手にして喜ぶ位の優しさを忘れてはなるまいと思ひます。そんなにごちしたうるほひのない生活でいゝなら、女ももういつそ、男の洋服でも着て、どし／＼やるがいゝでござりませう。わたくしは舊式でござりますから、女の命はやつぱり物の哀れを知るといふところ、詰りは優しさだと思ひます。花嫁から人形を取上げるといふ仲人さんのお心は、餘り冷めたすぎる

やうに思ひますが」といつになく少し興奮した口調であつた。元より私も心の中では然様思ふ。娘から人形を奪ひ取つたといふ事は、まるで私のこの小庵から、娘たちの拵へてくれた花壇を奪つたと同じ事であらう。

が、娘は、それについて、愚痴一つ云はなかつた。後ちに、私が娘の好きなチヨコレートを求めて送つてやつたのをきいて、その仲人さんは、盲目の愛はいけませんねといつたといふ事を耳にした。私は娘を甘やかしてゐると思はない、ましてや盲目の愛に溺れてゐると思はない。女はいつ迄もチヨコレートをしやぶる子供らしさ初々しさ、物優しささが、それは絶対に必要だと信じてゐるからである。



木犀の句の中に父病める
解 岡 草 野 玄 海

打明けてみれば此處にもある不平
評 氏の句全部を拜見すると、ホンの少しの事で満腹に近い気がする、自分の胸に自分で研ぎをかける必要がある、御近所の寺町四丁目には高田竹林君も居る。一段の御研究を祈る。

柳 木 大 輪 清

蟋蟀は怒つた聲にかまはない
評 大體によく言ひました、蟋蟀と来ると直ぐ蟋蟀に詠みたくなる、感傷的に出たくなる、それを突きぬいて詠んだ所を載く、だから川柳は止められない。

妻病みて白粉かたし今朝の秋
評 柳友に背の介氏がある、氏は巧みにかうした句をものする、川柳は季なんか無くともよいので、今朝の秋とすまざなくとも差つかへない。

工場の煙の驕り天を喰ふ
評 煙の驕りやとあつたが、強いてやを入れなくともよい、ズバといつた方が句に強味を加へる。

深 川 細 田 初 枝

句になつたころのどかな空の月
評 無事な句、併しこうした安易な所に満足してると、だん／＼自分の鎖を自

分てへらす事が生じる。

涼風が来た眞つ直に彌陀の道
評 心解で打つて行かうといふ川柳、所謂天の句、奥波落巻といふところ、しかしバタの句にも面白い味があるもの、作者は心得て居てほしい。

垣根越す隣の絲瓜みて暮す
評 遠慮無く言はして下さるなら、平權だと申し上げたい、前人がいろいろ作つて居るので、御氣もじとは十分思ふ。

病妻のぬけ毛哀しき今朝の秋
評 遠慮無く言はして下さるなら、平權だと申し上げたい、前人がいろいろ作つて居るので、御氣もじとは十分思ふ。

案外なみなりで服屋店に居る
評 庭の火に子の手小さくあつたつて久留米 江上 かねい

庭の火に子の手小さくあつたつて
評 庭の火に子の手小さくあつたつて久留米 江上 かねい

尼の袖紅葉はくぐるやうに落ち
評 避暑者がへりしみる、夫へ茶を入れぬ

小按摩の身の上を聞く秋の雨
評 近 江 大 愚 坊

旅愁しきり子の事母の事
奈良縣 水谷 良子

烏啼き郵便函が氣にかゝり
柳 木 大 輪 清

涼み豪寝で居る顔へ月が出る
福 岡 高 柳 噴 水

今日もまた空色消して工都昏る
小 樽 平 井 善 慈

刈萱と何か騒く指導標
岸 和 田 中 生

かみしめて撞木で殺す欠伸なる
鳥 山 大 輪 云 海

秋の風坐禪のあとに吹いてくる
東 京 市 み みの る

石女をつめたく坐せる冬の縁
深 川 細 田 初 枝

あの雲が暮さ背負かや秋の風
福 岡 縣 田 主 丸 白 鷺

無縁塔誰がささげし花の束
鳥 山 萬 壽 云 海

子を叱る母もやつぱり泣いてゐる
北 海 道 花 田 順 往

サア来いと銃後の御甲斐々々し
宮 城 管 原 仁 廣

こんな事位なんだとたちろかす
福 岡 縣 狐 禪 居 士

焼け跡の柱に目立つ火除け札
柳 木 萬 壽 云 海

街頭を斜に降吹く夜深し
柳 木 萬 壽 云 海

投稿規定

はかきに一回句数に制限なし
「浄土」編輯部柳壇係あてに送ること。

産着縫ふ妻と黙つて居て楽し
森 流 石

決死隊坊やの顔を振りはらひ
大 森 不 及

十八世紀ごろの足どりで散歩
三 浦 太 郎 九

酔どれの起ち上がる貌また香なり
金 枝 萬 作

海怖く子を浚はれた日の日記
中 山 寄 之 介

風吹けば花園の闇やや崩れ
廣 岡 義 明

商品の價値で商賈人の傲慢さ
石 原 青 龍 刀

國のため社のためけちん坊でよし
三 條 東 洋 樹

酒徒一人住む家にして絲瓜垂る
根 元 紋 太

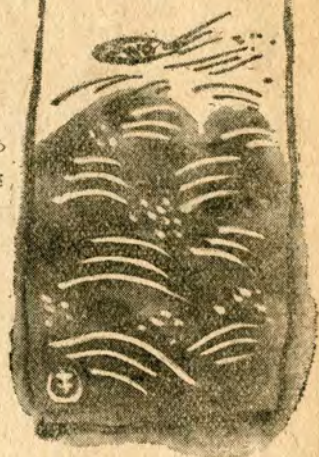
言葉尻とらへんとするわがころ
河 野 白 水

眞向へば死魔はやさしき眼を持
月 原 寄 明

てり
こほろぎの位置を病人知つてゐる

信
仰

感
話



清め の朝

清掃奉仕隊の話

金田明進

秋の山寺の朝は、又とない静かな風景です。ことし、冷気が多かったせい、百日紅の花もさびしく咲き終へて、はや、その葉がもみぢに色づき、ハラハラと風もないのに朝もやの中に散つてゐます。本堂から見ると参道の中門が、もやの中にくつきりと黒く浮かん

で、銀杏の實と、椎の實の落ちる音が、きこえるやうな静けさです。

二丁もある参道の敷石の上を、朝もやをついて、一臺、二臺、三臺と突進して来るいさましい自轉車の清掃部隊、それは、この町の關谷百貨店の毎月、先代の命日に行ふ清掃奉

仕隊です。關谷商店はこの町の古いお店ですが、代々滋賀縣出身の本宗篤信の店主によつて經營されてゐる地方きつての信用あるお店です。現主二郎氏はわが「淨土」の誌友であり、稀に見る篤信家で、二十名ほどの店員と共に革新期に於ける商業道に挺身奮闘されてゐます。

この店主指揮の下に全店員が、毎月この日に菩提寺の三千坪の庭を清掃奉仕されるのです。それは仲々に出来ないことです。町から六七丁も離れたこの山寺に、朝の營業開始前の尊い時間を奉仕されるのです。すつかり掃き清めたあとで、本堂の正面に整列して店主の首唱で本尊様に禮拜しついで古い大きな山櫻の下で先祖の墓地を掃き清め、華を捧げ、線香を獻じ一同店主と共に合掌參詣されます。私はある清掃の朝店主二郎氏に請はるゝまゝに、本堂前の廣場で次のやうな法話をさせて頂きました。

お庭をきれいにして頂いてありがたうのぞ
みました。

本尊さまも、御先祖さまも、皆さんも、私
も、こんなうれしいことはありませんまい。朝



こそは、わが日本の、わが佛教の、わが生活
の大切な時間です。

日本は、その名の如く、日の本の國であ
り、旭の昇りゆく朝を尊ぶ國です。

佛教も「浅き夢みじ酔ひもせず」で、ねほ
けたり、酔つぱらつたりしない、はつ
きりと眼のさめた、めざめの朝を尊ぶ
教へです。

私どもの生活も、この一日の出発點
を、ほんとうに清く明るく始めること
によつて、正しい生活が完うされると
存じます。

この尊き朝に、美化清掃を以つて、
先祖に酬ひ、本尊に誓ひ、業務にはげ
まれんとするみなさまは、本當にめぐ
まれた方々と思ひます。お庭清掃は、
そのまゝわが心の清めであり、わが身
の清めであり、わが業務生活の清めで
なければなりません。

今日、掃き清めねばならぬ塵芥の山積して
あることを、精神の方面にも、仕事の上にも
社會の上にも、否、ごうごうたる世界動亂の
上に東亞共榮圈の確立の上にも、ハッキリと
認めることが出来ます。この塵芥清掃が、聖
戦となり、世界新秩序建設の動きとなり新體
制樹立の運動となつてゐます。

どうかこの皆さま方の清き奉仕を、この意
味の聖きみわざとして頂くことを切望してや
みませぬ。

こんな意味のお話をいたしました。そして
ちやうど、私と一しよに朝のお念佛を終へた
誌友岡部さんも加つて、この記念撮影をいた
しました。

寫眞が出来ましたとき、店主關谷さんは
御佛の庭に仕へて我心

ともに淨めん今朝の清掃

と所感を詠んで下さいました。

寫眞は關谷商店の清掃奉仕隊、前列右端が
店主二郎氏、中央僧服の人が筆者

剣舞の時間でございます



丁度折悪く本人
風邪を引い
たもので
代用で
勇壯なる
川中島
エイツ、ハツ

献納曲藝

「ハイツアアアお客様
の家にまだ残つてる金物
はこの際持つて来なさい」
いくらでものせる事が出来る、のせた金物全部献納致します」



お歸りはこちらー
デテケデテケ
デテケ
デテケ



手品

「ハイこれなる
小さな慰問袋より
ワンツースリーで
いくらでも慰問品
が出てまいります
こんな慰問袋
を前線の
兵隊さんへ
お送りしたい
ものでございます」



中入りイー ドドンガ ドンく
「エーラムネ、エーのしいか。おしては
困りますヨ一列に並んでく」

次は江戸屋虎八さんの聲帯模寫でござめすお古い所で恐れ入りますが、ハトボツボを唄はして

ごらんに入れます
先づ最初に猿之助
ボツボツボハト
ボツボマーメガ
ホシイカソラ
ヤルゾ
次は羽左衛門ボツ
ボツボハトボツボ
次は菊五郎
ボツボツボハトボツボ
時間が見えました
おあとがよろしい様で



信仰

道徳と信仰



相談

(問)

佛教徒には平等思想の根柢

意識となるため眞實性を把握するやうになります

「一切衆生猶如赤子」とか「御同朋御同行」などから

は、たとへ自己本位の客観化したる如來を信ずる敬虔さ、また祖師祖先への報謝觀念は盛んなるも、人類同等の交渉には虚偽的敬禮が省略されることは確で、俗間道徳から超えた心理を持つやうになる。これが眞相でせうか。(品川・大井・倉田・藤井成果)

(答)

結構だと存じます。但し「俗間道徳觀から超える」と云ふことで

が、超えたと云つて、決して無視して居るものでないことをハッキリして置く必要があると思ひます。宗教が道徳以上だと云つても道徳は何うでもよいと云ふ意味ではなく、道徳

が追々可能になるものでなくてはならないでせう。法然上人の「五逆十惡のものも生ると

信じて少罪も犯さじと思ふべし」と云ふ御法語を味ふべきでせう。唯だ凡夫としての私達

には理想としてはさうであつても中々思ふやうにならず、自分の拙さ情なさ泣いて、ひ

たすら如來様におすがりするより外に手段がないやうです。孔子と云ふやうな大聖人でさ

へ「七十にして、心の思ふところに隨つて則を超えなかつた」と云ふことですから、反省

念佛を申す時のこと

(問)

(1) 私は四年

間肺結核で病床に

居り信仰に入りた

くて念佛したいの

ですが、無言療法

信仰相談

(質問歓迎)

擔當中村辨康

すればするほど、自分の拙劣弱小なことが痛感されるわけです。そこが淨土信仰の有り難いところで、如何なる罪深いものも救はれることを確信してよいと思ひます。

然しそれだからと云つてノホ、ンに構へて何の反省もしないのでは正しい信仰ではないでせう。かの天野四郎が法然上人の感化に依つて悔ひ改めたけれども、その盜癖はやめやめんとしても止められず、なげきなげき悲しみ悲しみ相當の永い期間自分の惡癖と闘ひぬいて漸く其のくせが止んだと云ふやうに、そこに苦しい惡戰苦闘があるべきです。



をやつて居りますので、口に出してお念佛が出来ません。唯だ心の中でお念佛を申すだけなので信仰生活に入れないで迷つて居ります。私が入れますでせうか。

(2) 病人のことで寝ながらお念佛を申して居ります。そんなことでよいでせうか。

(3) 御畫像をジツと見つめてお念佛を申すやうに、足もとの壁に額を掛けましたが、足もとなので勿體なくて何となく悪いことやうに思はれます。横の壁ですとジツと見つめて居ることが出来ません。何しろ寝たまゝなので止むなくさうして居るのですが、ましつかへないでせうか。

(4) 何んな氣持でお念佛申すことが本當なのでせうか。

私に唯だお救ひ下さいと言つてお念佛を申して居ります。また初め十分間位はお救ひ下さいませと言つた氣持で申して居ります。

が、その内、唯だ南無阿彌陀佛と空念佛のやうになつてしまうのですが、それでよいでせうか。どうぞお教へ下さいませ。

(東京府下・青木玄)

(答)

御病氣で御入院中とのこと、四年も御闘病なさいましたのですから、もう相當に御心境もお進みになつて居られることでせう。どうぞ御心靜かに御病氣を克服なさいますやう念じ上げます。お賀ねの件左に申し上げます。

(1) 無言念佛。古來から聲が自分の耳に聞へる程度のを「大聲念佛」と申して居り、自分の耳にきこへないのを「小聲念佛」としてやはり有聲と見て居るのでありますから、御自分に聞へなくとも心だけの念佛ではないのです。たとへ聲は出なくとも、喉や舌や唇が動いて居れば、やはり口稱念佛なのです。

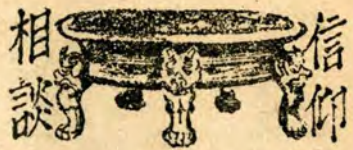
御手紙に「信仰にはいれないで迷つて居る」とございますが、それは「信仰」と云ふものに対する貴女御自身のお考、がまちがつて居

て何か特別な心境でもあるかの如く誤解し、重くお考へになつて居るからではないでせうか。御手紙の模様で推察しますと、もう立派に御信仰に入つて居られるやうに思ひます。

即ち如來様を信じ、念佛すれば救はれると信じ、如來無量壽の中に包まれて居ることを信じて念佛して居られるのですから、御立派に信仰に入つて居られるのだと思ひます。

(2) 寝ながらのこと。念佛は行住坐臥何れの時でもよいのですから寝ながらでも差支へありません。況して御病臥のこととて尙更ら御心配には及びません。

(3) 畫像の場所。善導大師の指南に依れば、西の壁へ掛けることになつて居りますが、それは達者の人の場合です。御病床におらるる身としては貴女のよろしいやうになさつても差支へありません。要は信を進めることに最もよい方法をお探りになればよいのです。足もととか頭の上とかさうした區別は御心配にならないやうになさいまし。唯だ恭敬の念、敬虔な氣持さへ失はなければよいのです。



相談

(4) 念佛の氣持のこと。南無は歸命ですから如來様の大生命の中に我が拙い小生命をまかせる氣持の表現です。歸はとつぐ即ち婦人の方が嫁して夫に取りつくと同じ氣持であつて、一切を如來様に委せ、しつかりと如來様に離れないで居る氣持で「南無阿彌陀佛」と唱へるのです。また古來から南無に「救我」と「度我」との二義ありとして居ます。救我の方は御手紙の御氣持の通りことです。度我とは「もつと向上せしめ玉へ」と云ふ念願です。

(5) 空念佛のこと。人の心から雜念を取るのには人の顔から眼鼻を取るやうなものだとは既に法然上人も仰つて居られますが、氣がついたら初めの時のやうな正念にかへればよいのです。佐々木高綱が法然上人に「念佛の時居眠が出て困るが何うしたらよいでせう」と賀ねられました時、法然上人は「醒めたらん

には念佛し候へ」と答へたと云ふ話があります。それでよいのです。氣がついたらよいのです。氣がついたら正念になればよいのです。それを何時までも苦にして居てはなりません。

大乘十來と親子は一世と無性卵と

(問) 一、前々山下管長様の御染筆の額面に「大乘十來」とあります。が、典據は經論祖釋の何れの文にあるのでせうか。

二、近松の淨瑠璃にあつたかと思ひますが「親子は一世、夫婦は二世、主従は三世」と云ふことが佛教信仰上私としては丸で正反對のやうに考へられるのですが如何でせうか。

三、嘗て淨土誌上に「精進云云」のお答の中に「魚肉ばかりでなく大根野菜にも生命あり」と承つて尤もだと思ひましたが、唯だ一つ疑問に思ふことは、雌雄ばかりの無性卵は、どんなに親離が温めても離

せん。過去をくやむ勿れ、未來を恐るゝ勿れです。現在の充實を心掛けて下さい。どうぞ御大切に、そして一日も早く御快癒になりますやうお祈りして居ります。

にはならぬさうです。然らばこの無性卵は食用に供しても殺生戒には觸れないと考へられます。如何でせうか。以上三問に就て御答辯を賜らば仕合せに存じます。(山口縣

(答)

「大乘十來」と云ふ言葉はよく存じませんが、若しかしたら「十來」でなく「十乘」の誤りではないでせうか。來を乗とは似て居りますから、貴氏がさう見誤つたのではありますまいか。若し「十乘」ならば法華經の「大白牛車」の譬から引き出された「十乘觀法」のことです。十乘又は十觀とも云ひます。空段中の三諦を觀するに十種の軌範あることを示したもので、法華經玄義

とか摩訶止観とか天台四教儀とか教觀綱宗とか天台八教大意とか云ふやうな天台關係の書物に出て居ります。御賀ねの十來といふ語は熟語に無いやうです。

二の「親子は一世夫婦は二世主従は三世」の譬へは何から出たものか知りませんが、恐らく現實的な因果關係から見たものではなからうかと想像されます。親子の關係は親の務めとしてその子を生長せしめ一人前の者に仕上げれば、それでもう次代を譲り得るから、義務は終了したと見ることが出来ますが、夫婦の關係は一代の義務だけでは解消されない氣持でせう。元々他人であつたものが結合して苦勞を續けたが、それは續け放しで死ねば解消してしまはねばならぬのでは、餘りにもあつさりし過ぎると思へます。切實した感情から言へば謂ゆる「二世も三世も」といつまでも持續したい氣

持がある筈です。無論煩惱妄情の然らしむるところではあります。また主従關係は扶知されることに依つて其家が持續されて行き、主人のある限り、そして何かの縮尻に依つて頸にならない限り續けられて行くから、三世は愚か何代でも關係が保たれます。それで最少限度の世數と終辭の上から「一世現世二世（現在未來）三世（過去現在未來）」と一應區別したものでなからうかと思はれます。

緣起の理の上からは、親子も夫婦も主従も其の關係に於いては決して一世や二世のものではなく、豈には永く三世を盡し横には廣く十方を盡して深い關係のあるものです。現在の如き單なる雇傭關係の雇主と使用人との間の水くさい月給の多少に依つて離合集散する状態であつても、佛教の緣起の理からは決して淺いものとは考へて居りません。西洋流の權利義務や物質中心の考へでさう思はせられ又はさせられて居るだけであつて、居る方が間違つて居るのです。親子も夫婦も主従も皆な夫々の深い因縁に依つて結び付けられて居る

ことを反省する必要があると思ひます。

三の問題の無性卵ならば食べても「殺生戒」にはならぬだらうと云ふ考へは、一應尤ものやうに思ひますが、實はさうではありません。私達に取つて私達の命をさしやる食物の「生命」の有無には關係なく、有性無性有生無生有機無機一切のものの恩恵なくして生きて行けない事實を深く反省する時、少くとも報恩感謝の心の起らない筈はありません。若し起らなかつたならば、それは忘恩の徒であります。唯だ命あるものの内は一層切實な私達に接近した氣持を感じると共に、生ある者が生命を愛さない筈はないその氣持を察する時、敢て之をなすならば「慈悲愛憐」の心の芽を枯らし、無殘な氣持殘忍な心を養ふことにもなるから、一應生あるものを殺すことを戒めたのが殺生戒なのです。ですから無性卵だから無反省で居て差支へないと云ふ理由にはなりません。この邊のことを御考へ下さるならば、あなたの御疑問もおのづから解消されると思ひます。





五、ないしょの話

次の朝、ビボーは夜あけ方に目をさました。

童話

勇敢なビボー

小林 一

仲のよい七人の兄弟たちがまちにまつてゐた赤ちやんが生れました。一ばん喜んだのはビボーです。それは自分が世話をする子供ですから。

した。大急ぎで着物を着て部屋の中をつかり片付けました。ところがどうせう。彼が部屋の扉をあけると笑ひ聲や騒ぎ聲が兄達の部屋から聞えました。彼はびつくりしました。お父さんから自分に、家の中を静かにしておくやうに頼まれたのではなかつたか。彼はあわてゝ兄

す。今丁度ヨストが大聲をあげて、柔い白い枕をルードキツヒめがけて投げつけたところでした。

「よし来いー」
とルードキツヒが叫んで、その枕をヨストに投げ返すと、ヨストは寢床の上にひっくり返りました。

「おい、ビボー、お前も自分の枕を持つて来いー」とヨストが叫びました。「仲間に入れ

たちのところへ飛んで行きました。ルードキツヒとヨストが華々しい枕合戦をやつてゐるところで、二人とも眞赤になつて騒いであま

よ」

ところがビボーは云ひました。

「皆んな静かにしなければ駄目だよ。下には赤ちやんがゐて、今静かに眠つてゐるのだよ」

「何に！」とヨストは寢床から飛び下りてもう枕合戦のことは忘れてしまひました。「だれからそんなことを聞いたんだ？ 赤ちやんは男の子かい？」

「うむ、妹だよ、とても小さい」

とビボーは云ひました。

「お前もう見たのかい？」

とルードキツヒは云ひながら、もう扉の方に歩いてゐます。

「駄目だよ、行つちやあ。こゝにゐなよ」

とビボーが命令しました。その聲があまり一生懸命なので、兄さんのルードキツヒもまたもどつて來ました。

「お前お母さんにもあつたの？」

とヨストが聞きました。

りました。二人の兄弟は寢巻のまゝ彼を取りまいて聞いてゐます。

「四時になつたらね、皆んなが赤ちやんに逢つてもいいのだよ、そして特別に静かにしてゐるのだよ」と云つて聞かせました。

「それはそうだ」とヨストがもつともらしく云ひました。

ルードキツヒは扉を少しあけて云ひました。

「マリイがまた歌をうたつてゐるよ。聞へるだろ？」

大きな歌聲と笑ひ聲が女の子の部屋からひびいて來ました。

コリーが高い聲で歌をうたつてゐます。

「踊りをおどつてらあ」

とヨストが云ひました。ビボーは驚いて姉妹の部屋に走つて行きました。

「静かに！ 何をさわいでゐるんだー」

かゝりました。でも、ビボーはそれをふり切つて云ひました。

「お前たちは何んにも知らないんだ。僕たちは静かにしてゐなければいけないのだよ。小さな妹が下にあるんだから。そして静かに寢なければいけないのだから」

三人の姉妹はビボーを取りまいて、ビボーはまた繰返してゆうべの出來事を話してやりました。姉妹たちは赤ちやんを見るためにすぐにも下へ行かうとしました。ビボーはそれを止めるのにずいぶん骨を折りました。そこへヨストとルードキツヒも來ました。そして六人の子供が圓くなつて、ひそ／＼聲で熱心に話し合ひました。すると突然扉があいて、お父さんがいきゐの上に立つてゐました。

「感心だぞ、ビボー。お前がどんなに骨を折つたか下ですつかり聞いてゐたよ」

とお父さんが云ひました。

「お父さん、妹を今見せてよ、ねえ、ねえ」

「駄目だよ。今お醫者さんと約束したばかりだからね。赤ちやんはまだとても小さいのだ

し、お母さんは大へんつかれてゐる。お母さんはよく眠つてよく休まなければいけない。看護婦さんが二週間お母さんと赤ちやんの面倒を見てくれるのだ。その間ちやう、お前たちはマグダ叔母さんのところでお晝をたべるやうにするのだよ」

「でも、叔母さんのところへ泊るのではないのでしょ」

とコリーがききました。ビボーもとても心配さうな顔をしてゐます。

「そうだよ、泊りはしないよ。晩ご飯はお家でたべるのさ」とお父さんは笑ひながら云つて、急に眞面目な顔をして「でも無闇に騒いだりするものはお家へおけないね」と云ひました。

「僕が皆んな静かにするようにしてやりますよ」

とビボーが云ひました。

「うまく行つたら、今日四時にお母さんに皆んなを一寸會はせて上げやう」とお父さんが云ひました。

「マグダ叔母さんは優しくていゝけれどもビーター叔父さんがとてもきびしいからなあ」とルードキツヒがこぼしました。でもお父さんは、ビーター叔父さんは晝ご飯に家へ歸つて來ることが出来ないのだと云ふことは云はずにおいて、たゞ笑つて出て行つてしまひました。

子供達はまだ長いこと話し合ひました。たゞヨストだけは黙つてゐました。自分が一番年かざだと云ふことを急に強く感じたのでした。お父さんはあの繁華な場所を通つて子供達をマグダ叔母さんのところへ行かせやうとしてゐる。あの近所は十二時頃は殊に危険なのだ。

「さあ、皆んな僕の云ふことを聞きなよ」とヨストは急に兄弟に呼びかけました。

「僕はコリーを連れて幼稚園に行く、ビボーもそこへ來ること、そこで皆んなが待ち合せて叔母さんのところへ行くことにしよう」一寸の間皆んなは驚いたやうでしたが、ヨストがあんまりきつぱりと云ひきつたので誰

れも反對する者はありませんでした。

「大變な行列になるね」

とルードキツヒが笑ひましたが、結局それがいゝと云ふことになりました。

「そうだね、四時には皆んなが揃つて赤ちやんを見に行くんだね。一番小さいものを先頭にしてさ。それから……」

とビボーは考へながら云ふのでした。

「それからどうするの？」

とみんなは待ちかねて聞きたがるのです。ビボーは時々うまいことを考へ出すからです。

「それからね……僕たちは赤ちやんに何か持つて行つてやるのだよ」

とビボーは云ひました。

「僕はお母さんに何か持つて行つてやろう」とヨストが云ひました。

「それはいゝね」

とビボーは兄さんを見上げました。「赤ちやんにも何か持つて行つてあげよう。僕貯金箱を持つてくらあ」

「僕も、あたしも」



とみんなが云ひ出して、一寸の間に貯金箱が澤山あつまりました。そして全部のお金をか

ぞへ上げました。

「僕はおもちやの動物を買はう。お母さんには桃を買つて行かう。それと僕の庭から花を一つ」

「さうだ。みんなが自分たちの庭から花を一つづつ持つて行くことにしよう」

「さう、さう！ みんながお母さんには果物を、赤ちゃんにはおもちやを持つて行かう！」

「みんながそろつて買ひに行かう。

だから、みんな幼稚園の前で待ち合はせるのだよ」

とヨスト。

「いゝとも。それからあたしはよそ行の着物を着るわよ」

とコリーが云ふのでした。

「みんなよ、行きを着るんだ」

とヨストが命を下しましたが、それと一つしよに自分の時計を見てびっくりしました。

「さあ、早くしろ！ 朝ご飯をたべなけりや
おくれるぞ。着物をきてゐるのはビボーだけ
だ！」

と叫びました。

「僕はパンを切つておくからね」

とビボーは云ひながら、靴を片手に持つて、静かに、しかもすばしこく階段を下りて行きました。彼は心の中でさけぶのでした。今日の午後はとてもすばらしいことになるぞ！と。

六、買ひ物

その日、みんなは學校でも気がちつてこまりました。皆んなの頭の中は、いろいろなこととでいつぱいになつてゐるのです。生れたばかりの妹は一體どんな顔をしてゐるだらうとか、お祝ひのきものをみて、お母さんはどんな顔をなさるだらうとか、どんな贈り物を買はうかしらなどといふことはかり考へてゐるのです。コリーは、どのおりポンをえらばうか、なかなか決心がつきませんでした。

ヨストはお母さんのことをひどく戀しがつてゐるので、先生がヨストに、眼鏡の玉を發見

したのはだれですかと聞かれて、「支那です」と答へたほどでした。コリーは自分たちの小

庭に咲いたはじめての日向葵が、赤ちやんの氣に入るだらうかといふことばかり考へこ

んでゐたので、自分の算術の宿題をやるのを忘れてしまひ、休み時間にそれをやらなければならぬ始末でした。又ビポーは、自分の

墓口がズボンのポケットにちやんとあるかどうか氣にして時々手をつゝ込んでゐたのでと

う／＼落して口が開き、お金をみんな床にばらまいてしまひました。女の先生は、それを

直ぐに見つけたうへ、その墓口を四時まで預つてしまひました。繪の上手なルードキツヒ

は、地圖に花と小包を持ちきれいな着物を着た七人の子供の繪を描きました。その繪の一

番小さな子が閉まつた扉を叩いてゐるところです。それを小さなコルネリユースにうまく

似せようと夢中になつてしまひ、氣がついた時には、もう先生が彼の後に立つていらつし

やつて、鉛筆をとり上げておしまひになりました。

「何か書用紙をあげませう」と先生はブリ／＼しておつしやいました。

「そして、地圖をよごさないやうにしてもらひたいね」

十二時に、みんなは會ふ場所に急ぎました

が、ルードキツヒが第一番で、二、三分後れて、他の者もそこへ來ました。そこでマグダ

叔母さんのところへお晝ご飯をたべに行つたのでした。よいことに、喧し屋のビーター叔

父さんがお留守でした。きつと叔父さんは會社でいつものやうにやかましいことばかり云

つてゐて御飯を食べる時間もなかつたのでせう！ その上に食事の後でマグダ叔母さん

は、一同を學校まで送つて下さいました。さて四時に、店に行つて、いよく大事な

買物になりました。ビポーは直ぐに決心がついて、キ／＼鳴く白い毛の仔犬を買ひました。しかし、他の者はそんなに早く自分の選

ひ、お店には親切な女の店員がゐて、笑ひながら兩腕一杯に玩具をかかへて來て、やがて、

銘々に小さな包みを手渡してくれました。ヨストは搖籠の中にぶら下げられる結び紐のつ

いたゴムマリで、マリーはお風呂人形、ルードキツヒは鈴のついた環、ビポーは仔犬、コ

リーは小さなおかしな風つきをした道化人形、アンニーはうんと小さな小熊、そして小

さなコルネリユースはいつも欲しいと思つてゐた笛でした。マリーは「コルネリユースは

それを自分のものにじたいのぢやないかな」と心配しました。しかし、ルードキツヒが、

「赤ちやんで、コルネリユースではないのだよ」と強くはつきりと云ひましたら、コルネリユ

ースは出来るだけ大きくビイツと笛を吹いて、「さうだよ」とうなづきました。

果物屋では買物は早く片づきました。よいことにまだ冬にならないので、果物は餘り高

くなつてゐませんでした、といふのは氣をつけないと、皆の墓口が空になるからです。ヨ

ストは美事な葡萄の房、マリーは立派なメロン（それはお母さんの大好物のものでした）ルードキツヒは六つの大きな温室イチゴ、ビポーは毛のある桃を一つ、コリーは立派なバナナを二本、アンニーは赤いアメリカ林檎を一つ、そしてコルネリユースは大きな黄金色の梨をとりました。それをみんないためないやうに家へ持つてゆくのが大仕事でした。五時半にみんなは家の前に立ちましたら、驚いたことにお父さんが戸を開けました。お父さんはもう家に歸つてゐたのです。ヨストはびっくりしました。變つたことがあつたのだらうか？ しかしお父さんはにくくして皆んなのところにやつてきました。「皆んなどうして荷物を背負つてゐるの？ 誰か足を折りはしなかつたかい？ そしてマグダ叔母さんは豊になる程大腰をあげなかつたかい？」「何も變つたことはありません？」ヨス



トが訊ねました。

お父さんは嬉しさに彼の顔を御覽になりました。「變りはないよ。私たちの小さな赤ちゃんをよく眠つてゐるよ。おっぱいも飲んだし、お母さんもとて元氣だよ。しかし、まだしづかにして寝てゐなければいけないのさ。でもほんの一寸ならお母さんのところへ入つてもよろしい」

皆は先づ着物を着替へてからにしうと申合せてをりました。

「そして花だよ」とコリーがさうやきました。

「お父さん、僕たち十五分たつたら、ゆきます」とヨストが云ひました。

お父さんはうなづかれました。皆んながなにごとかをたくらんでゐるのがわかつたのです。ヨストは時計をみて「十分間のうちに皆んなこの階段の下に来るんだ」と指導者のやうな調子で云ひました。（つづく）

或る病兵の手紙 (四)

信仰を獲るまでの圓ひの記録

第十信

先生、人の運命は一度つまずくともう立ちあがれないのでせうか。人間悪いことが重なる時はどうしてこうまで次々と悪いことが重なつて来るのでせうか。私は今泣いてゐます。思ひきり泣き叫んでみたい氣持をおさへながら、聲をのんで泣いてゐます。

昨日までの私は一切のものを恩寵と思ひ、萬物すべてに感謝いたすやうなれたと思ひました。いや少なくとも今の私の逆境を恩寵として受けいれ、感謝いたしました。

實は妻が本月一日に發熱しましたが、五日頃には大分よくなりましたので、少しは衰弱したものの、四、五日したら面會に来ると申し

てゐました。私も今度こそ或ひは最後の面會になるかも知れぬと思ひ、妻の來訪を心待ちにして待つてゐました。ところが妻は結局來ませんでした。その代り妻から鉛筆の走り書きで速達郵便がまいりました。私は云ひ知れぬ不吉の豫感に襲はれながら、急いでその郵便を讀みました。

「早速申し上げます。私の病氣はよくなるどころか、逆つて段々重くなりました。四十度の熱が下らず、十日間も斷食してゐます。昨日電報で親せきの方々に來て頂きました。昨夜は一晚中苦しみ通しました。明日入院いたす豫定です。」

人間の命なんてほんとに判らぬものですね。私の方が一足先きにゆくかも知れません。

貴方も餘り心配なさぬやうにして、ご養生なすつて下さい。ではきようなら」私は驚いたといふよりボンヤリしてしまひました。私はただ何うしよう、何うしたら良いのかと云ふ氣持の外に何も考へられませんでした。先生、これをも恩寵と見ねばならぬでせうか。

取り敢へずその日に折返して激勵の返事を出しました。そしてその翌十六日にその後を問合せた速達を出しました。しかし妻からは返事がありません。十七日は一日中いらして返事を待ちましたが矢張りありませんでした。私の頭の中は不吉な豫感がばいになつてしまひました。十八日の朝再び速達を以て問合せました。これにも亦返事がありません。私は自分の焦慮の念をもつて全く、何うしようもありません。

妻がこうして死んだとしても、無理にでも恩寵として受け入れませう。がしかし、後に残された三人の子供は何うなるのでせう。親はなくとも子は育つと云ひますが、親として

は子供の身長のもの比體重が増したことだけが育つたのだとは思つてゐられません。親の愛を知らない子供が、他人の手で育つてゆくのでせうか。私自身は自分の環境の一切を恩寵として受け入れ、そして感謝の生活も出来な

いことはないかも知れません。しかし、親が恩寵の内に暮らせていたとしても、その子供が恩寵を知る人間として育つてせうか。親のないのを恩寵として受け入れる素直な精神を持つてくれるでせうか。私はあれやこれやと獨り考へ、獨り悩み苦しんでゐます。

世の中の不良の少年少女は親のない子供に多いと申します。男なら未だしも、女ばかりの三人の子供が片親ならず兩親ともなくて今後何う育ち、何う暮してゆくでせうか。暗い陰惨な不良の仲間に入つて、三人の孤兒が何うして成人してゆくでせうか。

先生、私だけが、親だけが獨り恩寵に生きてゐてそれでよいのでせうか。素直になれと申されますが、これでも素直に平氣ですまされるものなのでもうか。總てを甘んじて受け

さへすれば、それで救はれると云はれますが例へ救はれると判つてゐても、これが甘んじて受け入れられるものでせうか。私にも最早知らぬ顔をしてお念佛を申してゐることが出来なくなりました。

それでもお念佛を申しました。しかし苦し

い心をまぎらはす爲のお念佛であり、出もしないお念佛を強いて口で唱へてゐるに過ぎません。素直な心もなければ、佛へ通ふ心もありません。こんな心で申すお念佛ではいけませんと思つてゐます。

私はいもう絶対に救はれません。しかし救はれないと云つて落ち着いてゐることも出来ません。一生懸命になつて何かを求めるのです

が、さつぱり半りません。従つてゐる念佛も仲々出て来ません。

私の心は自分で鬼だと思ひます。頭の中を何かで引かき廻してゐる様です。手近にある物を何もかも思ひきり投げつけ、たたき壊して仕舞ひたい衝動にかられます。私には氣持を満足させる程度のもものでは役に立たなくな

りました。縦からも横からも斷手として屈服させることの出来ない強い何ものかを求めてゐます。血走つた自分の目で本を読みましたが、とても駄目です。

先生、私は先生に何かを求めてこの手紙を書き始めましたが、こう書いて来ます内に、とても救はれる道のありやうのないことが判つて来ました。もう私も苦しむことも長いことではないでせう。それにまた先生も御多忙な御體で、私如きものに貴重なお時間を費やすことは申し譯ありません。

先生、勝手ですがもう御返事は要りません。どうも今まで長い間お世話になりました。先生の折角の御指導という／＼なお骨折にもかゝはらずその甲斐がなかつたことを重々お詫び申し上げます。

では何うぞお身體をお大切に

さようなら

六月十九日

死の床にあつて、信仰を求め、ある時は歡

喜の絶頂に立ち、ある時は絶望のどん底につき落され、幾たびか倒れては、いく度か立ちあがって、道を求めれば病兵酒井廣美氏の尊い信仰の體驗であります。遂ひに求めるところのも、絶対に念佛の生活に入つて凱歌をあげる迄のこの血みどろな闘ひの記録には何人も頭を下すにはいられませぬ。

第十一信

先生昨日は大變御取しい御手紙を書きました。私と云ふ人間はなんと情ない人間でせう。少し良いと宇頂天になり、一寸つまづくとき世を呪ふ。少し妹の調子が良いとそれに甘えて念佛も出来ぬ。からだの調子が悪ければ肉體の苦しみに負けて念佛が出来ぬ。逆境が来るといままで祈つた佛を、祈つたこの口で悪口したくなる。なほその上、存在さへも信じない。私はどうしても救はれません。私は素直さを失ひました、いや元から無いのかも知れません。私を救ふものがあるとすれば、理攻の聖道門の悟りでせう。然しそれは私の頭

では無理でせうしました私も求めやうとはしません。すると矢張り自分一人苦しむより道はありません。私は今迄、餘り先生や鈴木さんが親切にして下さつたので、それに甘んじて自分で求めようとする努力にかけて居たやうです。今度も先生のことですから、何とか言つて下さるかも知れませんが絶対に御手紙を下さらぬやうに御願ひ申上ます。私はもう可笑しくなつたり悲しくなつたりです、私はこの上何が来るか、次の逆境を待つてをります。来るなら来い！それが何處迄来るものかどこまで人間の力が耐え得るものか試して見てやります。耐え得なければ發狂するかも知れません。耐え得れば逆境を征服出来るかも知れません。戦つて居る中に死ぬかも知れません、もう構ひません。

信仰によつて別の心境がない悲しみは淋しい。私は自分の願ひ求めた死の恐怖を取去る事は出来ないのせう。逆境を喜ぶことも出来ないのせう。もう私は無理に信仰を得ようとは思ひません。勿論自然に出た念佛なら喜んでします。只、先生が一生懸命になつてをられるのに張合のない奴だと御思ひになるでせう。私は、それは申譯ないと思つてをります。どうぞ御許し下さい。

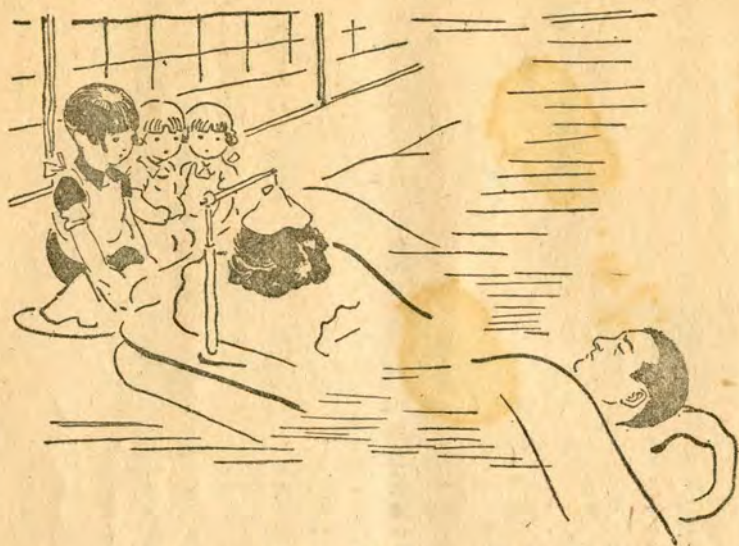
十九日も家の方から何の返事もありません。もう死期の近い私に知らせない心算ではないかと思ひます。

十一日に面會に來た弟に「姉さんは(家内)面會に來ないので。子供を全部連れて今度来る様に言つてくれ」と云つた時に「姉さんも病院でぶら／＼して居るので、近い中に来るだらう」と言つてゐたくらひです。私は最悪の場合を考へて、ふるへてをります。先生も餘り御丈夫でない様な御話でしたがどうぞお舂だけは御大切に さよなら

六月二十日

第十二信

御手紙誠に有難く感激して居ります。入院して十九日に手術をしたさうです。骨膜ださうで、廿三日母が來て始めてはつとすると同



時に念佛しました。経過良好ださうです。その代りこつちが激熱が續き始めました。なん

にしてもこんな譯ですからご安心下さい。千佛は田舎へ預ける、皆んな病院へ行くと

家はからつぽだつたさうです。

世の中は、一寸先は暗だと言ひますが、ほんとうにさうだと思ひました。自分が死ぬほど大きなことはないと思つて居りましたのに、今度は、より以上の大打撃でした。

鈴木さんには良く慰めて戴きました。其の鈴木さんも、四五日前に胃下垂と腸管内異状とかで、或は手術するかも知れぬとの事で安静にして居ます。

善惡ともに、本當にうまく行かぬものです。先づは簡単なから取敢ず御禮申上ます。

六月廿五日

酒井廣美

中村先生

二伸 昨日「淨土」二冊御送本

下され、末筆ながら深謝致します。今度大熱が出ればもう駄目ではないかと思ふ

とあふなくて仕方がないです。こゝ四五日毎日醫官殿がどうだ／＼と言つて見舞つて下さるので神經過敏にならざるを得んです。お笑ひ下さいませんやうに

よなら

私の信仰も進んで来さうです。私は大宇宙と自己を相對して考へて居りました。總て自己の内に見ることによつて佛も本願も納得出来ます。二三日來自分でも心境が變つて來る様なのを感じます。先生のお書き下さつた法然上人の小消息はまことに有難く拜することが出来ます。鈴木さんは、もう朝から晩迄念佛三昧の生活ださうです。鈴木さんのお手紙を見ましても先づ最初に南無阿彌陀佛・法・僧文末に南無阿彌陀佛、文中の句切り々にまで、本當に筆の先に迄歸依された御姿が現はれて居ります。

第十三信

實際御義やましい位です五月廿六日朝入梅も間もなく開ける事でせうが毎日どんよりとした天氣でうつとほしい事です。先生も毎日東奔西走、私如きがおこがましいことですが本當に御苦勞様で御座ります。先生の御多忙な意義ある御日常が私にも良く分ります。私の如來様に救はれつゝある今日は心からの先生の御救ひでした。至らぬ心からの暴言を心から御詫ひ申上ります。

さて、今迄私は入信と云ふ事に、餘りに絶大な希望をかけすぎました。感情が激して居る内は喜びもありますが、覺めて來ると亦淋しく、そして如來様を渴仰する氣持が亦ヒシ／＼と起きて來ます。そしてこれが入信した事實だとの先生の葉書にて分り、安心と同時に心細いものを感じました。然し之が眞理でせう。私の求めるやうな安心が、有る譯がないと言ふことが良く判りました。自然に生きたる、その儘に生きる、與へられたる儘に生きる、之が本當でせう。然しそれで判つて見ると、亦淋しくなつて來ました。死の淋しさ

別れの淋しみ、孤獨の淋しみ、然し此の淋しさは、淋しいと言ふよりも可愛そうな自分と、慰めてやりたい様な、ある一種の感傷的な氣持です。たまらなくなつて念佛をすれば尙淋しくなります。もう度々の事で看護婦に涙を見られるのが、はづかしくなりました。

然し昨日の様に變な手紙が一本舞込むと、それに氣を取られて腹が立つて／＼歩けるものなら、行つてどなり付けてやり度いなぞと思ひ、いら／＼として一日過しました。こんな時念佛でまぎらはさうとすると、餘計いらいらして來ます。法然上人が「煩惱起らば振り捨て」と申されますが駄目です。私は激し易い感情的の性質だからでせうか。何だか、歸依し切つた鈴木さんの今の姿を見ると、羨ましくさへなります。一體こんな事で良いのだらうかとさへ思ひます。

四五日前の入信の自覺だなど思つた時には非常に樂な氣持になりました。とてもゆつたりした氣分でした。「死ぬ時が來たら死ぬのだ、それ迄は生きるのだ、どちらでも良いのだ、

自分はその空を漂ふ雲の如くまかせて置けば如來様の方で良い様にして下さるのだ」と思つた時には、手足をぐんと延ばして、大の字になりました。

それが悲しくなるのは矢張り私は感情に生きる人間なのですね。

どうも今度はな／＼下禁しませんでした、簡單ですがこれで失禮致します。尚法然上人が一日に念佛を六萬遍、七萬遍となへられたことですが、無我の念佛をどうして數へられたのでせう。

私達が念佛するには、努めて無限に修した方が良いでしょう。

矢張り勵むために數をきめて稱へる方が良いでしょう。折を見て亦御教示をお願い申上ります。

七月七日

この手紙も四回に涉つて掲載され深い感銘を與へましたが、一應次號で打切ることいたします。

會員通信

十二月の
秋の夜の楽しいとき

小石川西信寺で

十月號の誌上に十月廿日と發表した「淨土」の友の會は主催者側の都合で十月十日に變更しまして（雜誌によつて廿日に會場に行かれた讀者には何とも申すありまひぬ）午後六時から東京市小石川區大塚仲町、西信寺（住職栗本俊道師）で開きました。當日御案内を出した向きは小石川、板橋、豊島、王子の各区の會員だけでしたが、來會の人々は約百餘名で仲々の盛會でした。

先づ西信寺住職栗本俊道師の司會で形通り會の順序を進めまして、誌上しお馴染の深い本會理事長中村辨康先生が正念を持すると云ふことについて懇切な且つ興味深々たる講話をなさつて聴衆に深い感銘を與へました。次いで文化映畫を三つ程映して興をそへ、更に、「夢遊丸様」の紙芝居（説明は濱野義光氏）法然上人御一代記の幻燈（説明は佐藤良智氏）で法然上人の繪巻をくりひろげました。濱野、佐藤兩先生の説明が堂に入つてゐる上に、一方は新しい

形式の紙芝居、一方は明治調の昔ゆかしい幻燈繪と云ふわけで來會者一同時のうつるのを忘れて見惚れ聞惚れてしまひました。それで一まづ會をうちきりまして、中村先生を中心に別室で座談に移りましたが、殆んど來會者全部が出席。

御國のために戦場で二人のお子息の靈を捧げた某氏が現在の心境と信仰の把持とについて質問をせられ中村師が自分の體驗のすべてを傾けて説明せられるなど晩秋の一夜にまことにふさはしい良い座談會になりました。一同時の過ぎるのも忘れてしまつて、散會した時はもうすつかり夜も更けてしまつて、信仰の深さに心をうたれつゝ外へ出た時にはびえきつた空には星が一つばいに輝いてゐました。

當日御出席の方々は勿論御多忙の中をお繰合ひ御出演願ひました中村師、濱野佐藤兩先生及び司會者として會場主として終始御骨折下さいました西信寺住職、本會理事栗本俊道師に厚く御禮申上ます（本部員）

貴重な文章

一筆申上ます。淨土九月號の法語感話仰せのまゝに伊藤宏天様の文章には全く感心いたしました。一言御禮申上ます。死生觀とか申す事は私共無學なものには一向呑み込めませんでした。秋の御彼岸に當り、心靜に右文章を再三再四熟讀して視ました。私の臆けた死生觀をはつきりしたものにしておさいます。平易に書いて下さいました。導いて下さいました。全く貴重なものと存じます。（鹿兒島、西村正一）



求道への發足

法然上人御法語抄解説（その一）

中 村 辨 康

後 方 語

それ流浪三界のうち、いづれの界におもむきてか、
釋尊の出世にあはざりし、輪廻四生のあひだ、い
づれの生を受けてか、如來の説法をきかざりし。
華嚴開講のむしろにもまじはらず、般若演説の座
にもつらならず、鷲峰説法のはにものぞます、
鶴林涅槃のみぎりにもいたらず。われ舍衛の三億
の家にやどりけん、しらず地獄八熱のそこにや
すみけん。はづべし、かなしむべし。
まさにいま多生曠劫をへて（も）、生まれがたき人
界に生まれて、無量劫をおくりて（も）、あひがた

き佛教にあへり。釋尊の在世にあはざる事は、か
なしみなりといへども、教法流布の世にあふ事を
えたるは、是よろこび也。たとへば目しゐたる龜
の、うき木の穴にあへるがごとし。
あるひは金谷の花をもてあそびて、遅々たる春の
日をむなしくくらし、あるひは南樓に月をあざけ
りて漫々たる秋の夜をいたづらにあかす。あるひ
は千里の雲にはせて、山のかせきをとりとしを
おくり、あるひは萬里のなみにうかびて、うみの
いろくづをととりて日を重ね、あるひは嚴寒にこほ
りをしのぎて世路をわたり、あるひは炎天にあせ

をのこひて利養をもとめ、あるひは妻子眷屬に纏はれて、恩愛のきづなさがたし。あるひは讎敵怨類にあひて瞋恚のほむらやむ事なし。

かくのごとくして、昨日もいたづらにくれぬ。今日も又むなしくあけぬ。今いくたびかくらし、いくたびかあかさんとする。

それあしたにひらくる榮花は、ゆふべの風にちりやすく、ゆうべにむすぶ命露は、あしたの日にきえやすし。是を知らずしてつねにさかへんことをおもひ、是をさとらずしてつねにあらんことをおもふ。しかるあひだ、無常の風ひとたびふきて、有爲のつゆながくきえぬれば、これを曠野にすて、これをとをき山におくる。かばねはついにこけのしたにうづもれ、たましいはひとりたびのそらにまよふ。妻子眷屬は、家にあれどもともなはず、七珍萬寶は藏にみても益もなし。たゞ身にしたがふものは後悔のなみだ也。

すみやかに出要をもとめてむなしく歸る事なかれ

解 説

(登山狀の一節「法語抄二——七」)

私たちは今までに生き替り死に替りどのくらゐながい旅をつゞけてゐましたやはかり知れないことであります。欲のまゝの世界、唯物思想に捉らはれて居る世界、精神的な抽象觀念をもてあそぶ世界など、いろ／＼の境界を、あだかも大海の浪があてもなく風のまに／＼に流れ流されてゐるやうに、たゞ煩惱妄念のおもむくまゝにいたづらにおし流されて來たのです。現にからして煩惱の中に生活して居る事實が、それを有効に證據だてゝをります。

然しながら、その永い流浪の旅の間には釋迦牟尼世尊も印度にお生れになつて尊い生死解脱の教をお説きになり、多くの人々の反省と覺醒とをお導き下さつた事實もあるのですから、機縁によつては、そこに生れ合せて教を受け得られないわけではありませんでしたせうに、悲しいかな。それに出遇ふことの出来なかつたのは、何處か分りませんが丸で縁のないところに生れてゐたからであります。

また私たちは業縁の導くところ、色々な生を受けなければならぬ身の上であります、その胎生(胎盤を持つて生れ

るもの。即ち獸類、人類など）と卵生（卵から生れるもの。即ち鳥類、爬虫類、昆蟲類など）と濕生（濕氣に依つて生れるもの）と化生（何もないうところに不意に生れ出るもの）との四つに大きく分類される一切の生の中で、たとへ鳥や獸や蟲などでも、如來の説法を聴聞したことによつて解脱の機縁となつた幾多の例をさへきいて居りますのに、一體何の生を受けてゐたのでせうか。屹度最下等の生に生れてゐたので釋迦牟尼如來の御説法を聞く機會を得て居なかつたのでございませう。

まして華嚴經や般若經や法華經や涅槃經などの大乘の御教を聞き得なかつたことは云ふまでもありません。

傳へ聞くところによれば、釋尊は舍衛城の祇園精舍にはかなり永くおとどまりになつて色々御説法を遊ばされました由ですが、その舍衛國には九億（日本の數によると九十萬）の人がをり、その三分の一の人々は佛を拜んでたとへ僅かなりとも御話を承る善縁が恵まれ、また三分の一の人は釋尊と云ふお方ををられることを噂さに聞いただけであり、残りの三分の一は全然何も知らなかつたと云ふことです。同じ時代に生れ合せた人です。同じ時代に生れ合せた人でも機縁が熟さぬと噂さにさへ聞くことが出来なかつたのですから、たと

へ私たちがその時に生れ合せてゐたと假定しても、残り三億の人達の仲間であつたかも知れませんし、また八熱地獄のやうな間斷のない大苦惱の底の中にあへぎもだえてゐて、何事も耳に入れる餘裕のない境界だつたのかも知れません。まことに悲しい極みであり、おはづかしい次第であります。

然しながら今幸ひにも多生曠劫の永い／＼生を幾度繰返したとて、容易には生れ出る機會のない人間の世に生れ合せてをり、その上、無量劫と云ふ永い／＼時間を経ても到底あひ得ないと云はれる佛のみ教にあひ奉ることの出来たのは、本當にこの上もない幸せであつて、釋尊には親しくおあひ出来なかつたことはかなしいことではありますもの、そのみ教が隱滅せずこのやうに流布されて居る現在のやうな時に生れ得て、佛教を聞き學ぶことの出来るのは、是れまことに申しやうもない喜びと云はねばなりません。それは丁度盲龜浮木の譬へのやうな稀有なことであります。

盲龜浮木の譬は涅槃經に出て居ることあります。則ち大海の中に盲の龜がゐて百年目に一度づゝ水面へ首を出すのださうですが、一方にはその大海の中に一つの孔のある木が浪のまに／＼漂流してをりますが、龜の方は目が見えず、浮木の方はでたらめに流れて居るのですから、中々その龜と木と

ぶつかり合ふ機會が澤山ある譯には行きません。たま／＼ぶつかつたとしても、うまくその穴にスボリと龜の頭がはまり得るか何うかはとても保證されません。全く極めて稀な偶然の機會と云ふのみです。それも百年に一度の浮びですから何千年目か何萬年目か何億年目か出遇ふことはまづ／＼むづかしいでせう。人身を受けること、またこのやうに困難なことでたと云ふ譬へなのです。しかも更に佛教に遇ふことの困難さは一層だと申します。この故にこのことを心に深く考へますならば、今日の私達の幸運はたとへやうもない大きな喜びと云はねばなりません。

つもつて見ればよくわかることです。切角人間に生れて來ながら貴賤富貴皆ないたづらに人生を空しくしてゐることは實に惜しいことです。

富貴の人は、春は花に酔ひ秋は月に遊んで、眞實に道を求むる心をも起さず、うか／＼と享樂の中に日を暮らしてゐるだけです。他の多くの人は、或は山奥深くわけ入つて鹿やけものをとつて年月を送り、或は遠く海上にこぎ出で、色いろの魚を漁つて、一日一日の生活を重ねてをりますし、或はまた寒い凍ついた冬空に、或は炎熱もゆる夏の日の流汗の中に、利を求め養ひの糧を求めつゝ走り廻ることに追はれて、

道を求むる氣持とてもなくあたら一生をむなしくすごしてをります。しかも内には妻子眷屬の爲に束縛されて恩愛のきづなを斷ちきることも出來ず、外には仕事や商賣や名譽や金錢やなどで怨みを結び敵を作つて瞋恚の炎をもやして居るのが現状です。何と云ふ淺ましい情ない姿でせうか。私たちはかやうにして昨日もいたづらに過ぎ、今日もまた空しく暮れて行かうとしてをります。願ふすれば今日まで過去何十年夢のやうに明け暮れて來ました。誠になさけない極みです。然るに今尙ほそれを反省しやうともせず、これから先の毎日をもまたこのやうにしてくらしかさうとしてゐるのです。一體いつになつたら覺醒しやうとするのでせうか。ぐづ／＼してゐる内に、厭でも應でも此の世を御暇して苦のさすらひを續けなくてはなりませんでせう。

朝のうら／＼かに咲き榮えた花も、夕方の風には散つてゆきますし、夕べに結んだ草の露も朝の日光にあへばすぐ消えてしまひます。新陳代謝隆替消長は人生の常態です。またこれがなければ天地全體の進展にもならないのですから、如何なるものも、如何なることも、それからのがれることは出來ません。然るに私達はこの當然の事實を悟らず、當分死ぬ氣遣ひなしと思ひこんでをり、また常に存續せんことを念願

し、常に榮えんことを念願してゐて、ちつとも反省する氣を起してをりません。のみならず、そのことに就いての覺悟を定むる志も起してゐないのです。

だが、時間は刻々に過ぎて行きます。段々命數は盡きるばかりです。ふつと息がつまればもう駄目です。取りかへしは絶對につきません。やがて焼かれうづめられて、唯だ徒らに草の肥料となるだけです。謂る朝の紅顔も夕の白骨で、この五尺のからだは跡方もないでせう。唯だた、まいが獨りさみしく六道迷路の旅にさまよひ歩くだけです。

「吉水會」尼僧の赤誠

淨土宗の全國約一千の尼僧が組織する吉水會は本部を京都に置いて、教戰の第一線で種々目覺しい活躍をしてをり淨土宗務所に於て募集してをる「陸海軍病院慰問淨土」の寄附にも數回に涉つ既に數百圓の寄附をされてをります。

その吉水會では兼て「愛國機吉水號」の獻納のため五萬圓の淨財を募つてをりましたが、この程第一回分三萬圓が集りましたので、去る十月九日に淨土宗教學部長江藤滋英師と同會代表七名が墨染の衣もつつましく陸軍省恤兵金品掛に出頭して、全國尼僧の愛國の熱情のその三萬圓を獻納しました。

その時はたとひ泣き叫ぶ妻子眷屬がありましたとしてもあの世にまでついて來ては呉れませんし、たとへ萬の寶や財産があつたとしても、たましいを呼びかへす力はないのです。唯だ身に從ふものは後悔の涙ばかりではありませんか。その時になつて、あゝ達者の時、早く道を求めて置けばよかつた、もつと早く信仰を得て置けばよかつたといくら悔んで見たところで、もう追ひつきません。

淋しいことを言ふやうで誠にいやですけれども、本當のことです。眞剣な話なのです。ですから、一日も早く此のことに氣づき、一刻も早く信仰を求められんことをおすゝめいたします。

その信仰のことは是れから追々に申し上げますが、念佛の信仰こそは生死を達觀し正眞な覺醒を養ひくれる最も重要な道なのです。むつかしい聖の道ではありませんから、誰にでも志だにあらば出來得る道なのです。

ですから此の出離解脱の要道を求めて、再びむなしく迷ひの中に戻ることのないやう致したいものです。(つゞく)

こゝに掲げた御法語は本會發行の藤井實應編「法然上人法語抄」(價三十錢送三錢)によるもので、従つて、番號も「法語抄」中の番號によつてをります。

編輯部だより

◇本誌は用紙の割當減、讀者数の増加、印刷諸費公定價の決定等によりまして、若干頁数をへらしましたが、内容に於ては相當厳選したつもりでをります。今後其實の向上に力をそゝぎます。本誌の眞價を發揚して行くつもりであります。

◇前線〇〇に奮闘してゐる本部員辻重光君からも元氣なたよりをよこしました。續いて村瀬秀雄君からも讀者諸賢によるしくと云ふ

「淨土」誌友會御案内

十一月五日午後六時半より

東京市淺草區石濱町一丁目八

玉蓮院 (吉野町三丁目下東へ一丁半左側)

講師 江藤滋英師(豫定)

法然上人御一代記幻燈、紙芝居

(無料) 本會主催

額りを受取りました。皇國のために生命を抛つてたゝかつてゐるこれら本部員のことを思ふと、少しぐらゐいそがしいからと云つて悲鳴をあげてゐる譯にはまゐりません。負けずに奮闘していよいよ立派な淨土にして行かなければならぬと云ふ譯です。何卒皆様も大いに御支援下さいませう。

◇こんど本部に池田立基上人の御息池田閑基君が入つてくれました。まだ若い穩厚の君子、これから大いに活躍してもらふつもりであります。

◇中村辨康先生には「十七條憲法」の講義を連載して頂く筈でしたが編輯の都合上、いづれ機を見て發表することゝし、法然上人御法語の講義を連載していただくことになりました。この講義に引用する御法語は、藤井實應師編の「法然上人法語抄」(本會發行定價三十錢送料三錢)によつてをります。

右の書はまだ殘部がありますので御申込次第御送りいたします。

◇吉田先生の隨筆は毎度申すことながら本誌最大の誇りの一つでありまして先生も毎號たのしみにして御執筆下さつてをります。先生をお訪ねするたびにいつも思ふことですがその深い思索と生活との間隙なき一致には頭を下げずにはをられませぬ。

◇子母澤先生も新聞小説御執筆のおいそがしい中を引續いて隨筆を御執筆下さいました。圓熟の境に入つた先生の語る感慨も亦一つの宗教でありませう。

◇「ある病兵の手紙」も四回に渉つて連載され、その血みどろな信仰への戦ひの記録は各方面からの反響をよびましたが、いよいよ次號をもつて打切ることいたしました。手紙の主廣澤氏も目下療養所にあつて肉體と精神のたくまし

淨土 十一月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和六年十月十日印刷納本
昭和六年十一月一日發行
(定價十二錢)

東京市芝區芝公園十五號明照會館
編輯兼 眞野正順
發行人

東京市芝區芝公園十五號明照會館
印刷人 赤尾光雄
印刷所 大日本印刷株式會社

東京市牛込區圓町七
配給元

東京市神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑽仰會
東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢

(送料五厘)

會費 金一圓二十錢

(送料共)

一ヶ年

廣島文理科大学教授
文學博士

山本幹夫 著

新刊 法然佛教とわが國體思想

神國日本の教法として開創された法然佛

教を歴史的に解明す。時局下必讀の書！

日本佛教の發展が法然佛教に到つて初めて萬民翼賛の教法として現れ大成されるまでを總ゆる資料により解明されてゐる。

先づ日本佛教と日本國體とを中心にして、神國日本の教法として佛教が展開し來つた史的實相を示す本書こそ、淨土教徒のみならず廣く萬人の知らんとするところである。わが國ならではと思はしめる新宗の開創の根據を説いて餘りなし

わが國體思想からみた
法然佛教の新しい基礎づけ

A5型クロス装箱入
價 二圓 二十錢

送料 十錢

會員に限り

送料當方負擔

目次

序論

- 一、法然佛教の前提
- 二、法然佛教の機構

本論

第一編 日本と日本佛教

- 三、神の國と人の國
- 四、神道と佛法
- 五、天照大御神
- 六、祭政・教一如
- 七、國體と國民道德と教學
- 八、肉身的と法身的

第二編 日本佛教の展開

- 九、佛教の公傳以前
- 一〇、佛教公傳紀とその背景
- 一一、日本佛教の發足
- 一二、十七條憲法
- 日本佛教の原理

- 一三、國家佛教

- 一四、國家佛教の内外
- 一五、平安佛教の歸結

第三編

- 一六、法然佛教序觀
- 一七、新宗開創
- 一八、法然上人の宗教體系
- 一九、選擇本願念佛
- 二〇、平等の慈悲
- 二一、萬民翼賛の教法

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十六年十月廿日印刷納本 昭和十六年十一月一日發行

淨土 第七卷 第十一號

（停）

定價 金十二錢（送料）
滿鮮臺等 金十三錢
外地定價

（五厘）

番七八一二八京東替振
館會照明國公芝區芝市京東

會仰鑽人上然法 所行發